

# 環日本海交流史研究集会の記録

## 「縄文時代の装身具 一漆製品、石製品を中心として—」

### はじめに

所長 谷内尾 晋司

石川県は、日本列島日本海沿岸のほぼ中央部に位置することから、古くから海を媒介とした東西交流の場、結節点としての役割を果たして参りました。また、日本海沿海域各県の埋蔵文化財調査機関では毎年新たな発見が相次いでおり、累積した膨大な調査成果をどのように研究し活用していくかが、大きな共通的な課題となっております。このため、当センターでは「環日本海文化交流史研究事業」を企画し、基礎的な調査研究を進めるとともに、沿海域各地の調査機関の皆様に呼びかけ、平成12年度より、「環日本海交流史研究集会」を開催しているところであります。また、平成18年度は、衣装、装身具など「古代の装い」を事業の柱とした各種の講座や体験学習など実施しており、今回は、「縄文時代の装身具」をテーマに開催することといたしました。

縄文時代の装身具は、社会の発展段階に応じた独特な形の製品が次々と現れ、ものとしてだけではなく、文化的情報を含んで流通しております。北陸では、富山県の境A遺跡や新潟県の長者ヶ原遺跡などの翡翠製玉類の生産遺跡が所在し、その製品が列島各地に供給されたことが知られております。また、近年の調査により、北陸から東北・北海道の沿岸地域には、石川県米泉遺跡、新潟県青田遺跡、青森県平野遺跡、北海道カリンバ遺跡など、堅櫛や糸玉などの特色ある漆製品を出土する遺跡が広く分布することが確認されつつあります。

こうした状況をふまえ、今回の集会は、日本海側の遺跡で発見されている装身具、特に漆製品・石製品を中心に、出土状況と地域的特色を比較し、地域間交流の在り方を考える場となればと考え、開催いたしました。九州は熊本大学の大坪志子さん、山陰は島根県埋蔵文化財センターの米田克彦さん、北陸は福井県あわら市の木下哲夫さん、当センターの西田昌弘さん、富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所の山本正敏さん、新潟県立歴史博物館の荒川隆史さん、東北は秋田県埋蔵文化財センターの小林 克さん、北海道は函館市教育委員会の阿部千春さん、恵庭市教育委員会の上屋真一さんにお願いし、各地域の実態や状況についてご報告いただきました。玦状耳飾や堅櫛をはじめとした各地域における様々な装身具の消長、形態変遷、地域的特色、技術的系譜やその伝播経路など、多岐にわたる問題や課題について討議され、相互理解を深めることができたことは大変有意義でした。

当センターでは、今後とも、テーマを替え、継続して年1回の「交流史研究集会」を開催してまいりたいと考えております。この事業が日本海を媒介とした地域間交流史研究の進展に一定の役割を果たし、多少とも日本海沿岸地域の特性を把握し、本県が持つ歴史的意義の解明に寄与することが出来ればと思っております。さらに、この「交流史研究集会」が日本海沿岸地域の各調査機関等の研究交流の場となることを願っております。



## 九州地方の石製装身具 —後晩期の玉類を中心とした石材同定—

大坪 志子（熊本大学埋蔵文化財調査室）

### 1. はじめに

日本国内でのヒスイ産地発見、さらに蛍光X線分析による新潟産のヒスイの広域分布の判明、これは画期的な発見であったが、逆に調査者には「緑色の石＝ヒスイ」という先入観を持たせることにもなった。九州では緑色の石であれば先ずヒスイと言われ、ほか蛇紋岩や緑色片岩などとも報告される。こうした報告に基づく玉の生産像は、「東の玉を使った」「九州各地で在地の石も利用する」という漠然としたものである。近年、藁科哲男氏が鹿児島県上加世田遺跡・大坪遺跡で使用された石材が、ヒスイでも蛇紋岩でもないことを明らかにし、諸特徴を総合して結晶片岩様緑色岩と仮称しており、九州と本州で数箇所づつこの石は確認されている。氏は、未発見のこの石材は恐らく南九州に産出し、この石材を使用して上加世田・大坪遺跡などで玉類を生産し、九州や本州に供給されたという仮説を立てている。今回、九州の玉類の石材を理化学的に同定し正確な情報を得るとともに、藁科氏の仮説を検証するために蛍光X線分析（福岡市埋蔵文化財センター：比佐陽一郎氏）・粉末X線回析（九州大学：上原誠一郎氏）・偏光顕微鏡観察（北九州市立自然史歴史博物館：森康氏）・肉眼観察および実測（熊本大学：小畠弘己・大坪）を行った。対象とした遺跡は後晩期を中心に早期から晩期末まで165遺跡、889点である。

### 2. 蛍光X線分析の結果

**結果①** 藕科氏が結晶片岩系緑色岩と仮称する石材は、主に白雲母からなり多量のクロムを含む変成岩の一種であることが判明した。従って「含クロム白雲母岩」と呼称する。

**結果②** 表1の左は、報告書の記載に基づく玉類の石材の種類と比率、右が今回の分析による石材比である。約2割を占めていたヒスイは実際4%に過ぎないことが判明した。また蛇紋岩、緑色片岩といわれたいたものも大幅に減少し、玉類の約7割が含クロム白雲母岩であることが判明した。次いで滑石が多く、玉類の石材が含クロム白雲母岩と滑石でほぼ統一されていたことが分かった。

**結果③** 表2は時期別の玉類に使用された石材比である。後期後葉に含クロム白雲母岩が急激に増加する。これは、勾玉・管玉・小玉など新出の小型化した玉類の出現と一致、晩期末には碧玉と入れ替わり弥生時代に継続するのが分かる。また、これは色彩に関して緑色への傾倒を端的に示している。

**結果④** 図1は九州の変成岩帯と含クロム白雲母製品出土遺跡、図2は製品のみの遺跡と未製品出土遺跡の分布図である。分析の結果、九州中にはほぼ満遍なく含クロム白雲母岩製品が分布している、また、中九州の熊本平野北部に遺跡が集中していることが分かる。生産遺跡についても同様であり、中九州熊本に集中していると同時に、各地に点在している。各地域の中核となる遺跡で、玉生産が行われていたといえる。また、変成岩帯との関係上、含クロム白雲母岩の産地は南九州の可能性は低いと考えられる。  
おわりに

縄文時代、特に後晩期の玉作りは予想以上に統一性をもって行われていたことが判明した。石材と製品との対応関係の把握が今後の課題である。今回の作業中、熊本では含クロム白雲母岩を「孔雀石」を呼び、一部古考の間ではヒスイや蛇紋岩と区別されていたことを知った。石材同定には最終的に理化学的手法が必要となろうが、先ず石材に共通の認識を持つ、或いは統一して広く見るということも必要だらうと痛感した。最後に、今回の会では、多くの情報と多くの方々との御縁を頂きました。お世話くださいました石川県埋蔵文化財センターの皆様には、文末ながら感謝申し上げます。

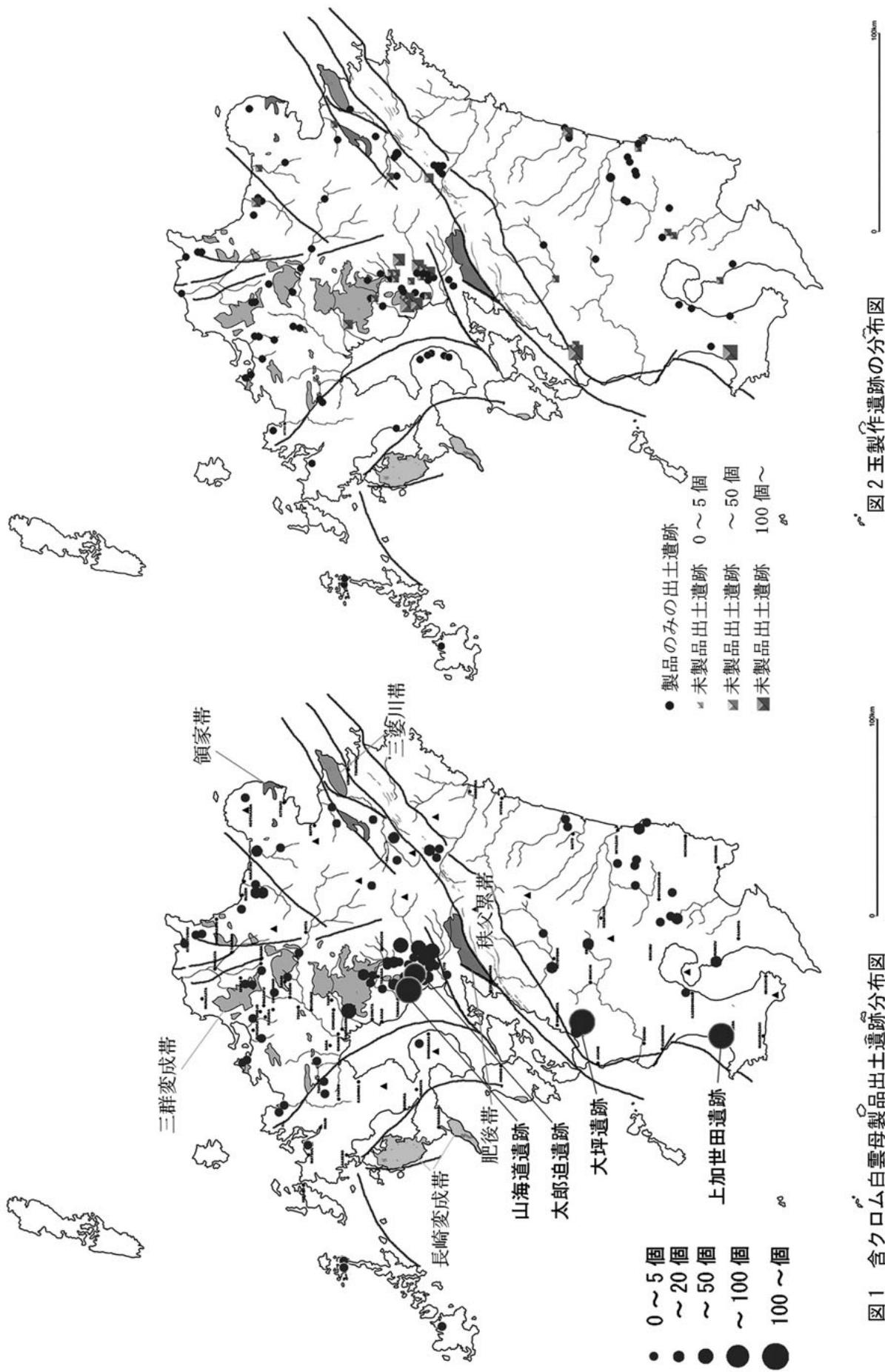


図1 含クロム白雲母製品出土遺跡分布図

図2 玉製作遺跡の分布図

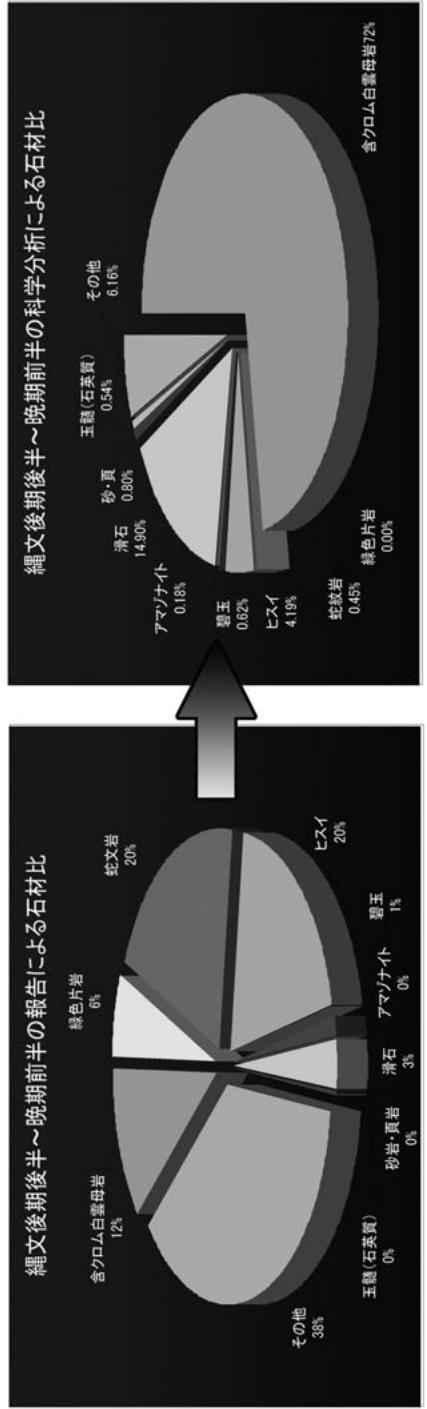


表1 理化学的手法による石材同定結果による石材構成比の変化

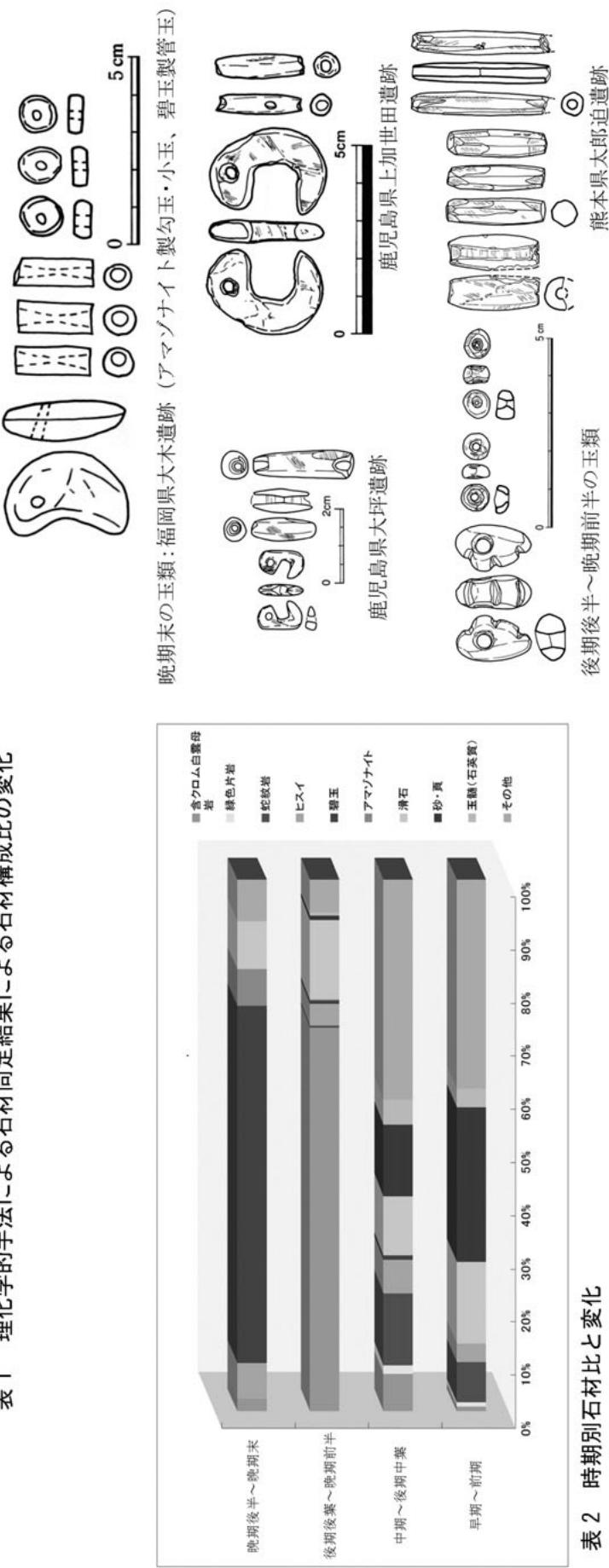


表2 時期別石材比と変化



## 山陰地方における縄文時代の装身具

米田 克彦（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）

### 1. 装身具の変遷

山陰地方における装身具の初現は縄文時代早期である。上福万遺跡の軟玉製「蝶形」石製品や日脚遺跡の貝岩製垂玉を見る限り、石材や形態は多様で、定形化された垂飾品はない。

前期になると块状耳飾が出現し、矩形（A類）と円形（C類）の類型が存在する。石製玉類ではジャスパー製管玉・サメ歯形垂玉、蛇紋岩製「の」字状石製品のように、無彩色の灰色系石材による玉類・石製品が認められる。また貝輪や牙玉のように自然遺物による装身具も現れる。当該期の装身具には貴石や鮮やかな有彩色の素材は使用されず、生活環境に身近な素材を利用していると考える。

中期の装身具は島遺跡の貝輪のみで、様相が明らかでない。ただ、瀬戸内海沿岸の岡山県津寺遺跡出土の糸魚川産ヒスイ製大珠は、中国地方におけるヒスイ製品の初現に位置づけられることから、当該期に緑色の嗜好性かつ玉材の希少性、硬さの価値観が装身具に付加された可能性がある。

後期は縄文時代を通じて最も装身具の材質・器種が豊富で、装身部位も頭部・耳・首・腕と多様化する。また色調をみると、玉類は緑色、漆製品は赤(朱)色、貝輪は白色を基調とし、最も華やかとなる。石製品ではヒスイ製大珠が衰退し、晩期にかけてヒスイ製丸玉、「結晶片岩様緑色岩」（編者註、大坪氏報告の含クロム白雲母岩）製勾玉・管玉、蛇紋岩製丸玉、滑石製小玉などの玉類が盛行する。块状耳飾では石包丁形（F類）が認められ、山陰地方に偏在的な分布を示すことから、隠岐諸島を含めて地域性を形成していることが指摘されている（藤田1983）。さらに木製品では漆製品（櫛・耳飾・腕輪）・かんざし、土製品では耳栓・滑車形耳飾、貝製品では貝輪がある。このうち井手跨遺跡の漆塗櫛は列島内最西端の出土例となる。

晩期には块状耳飾や耳栓・滑車形耳飾が衰退し、石製品のみに収斂される。石製玉類は後期に統いて緑色系石材（ヒスイ・「結晶片岩様緑色岩」）を指向する傾向が強く、弥生時代に継承される。

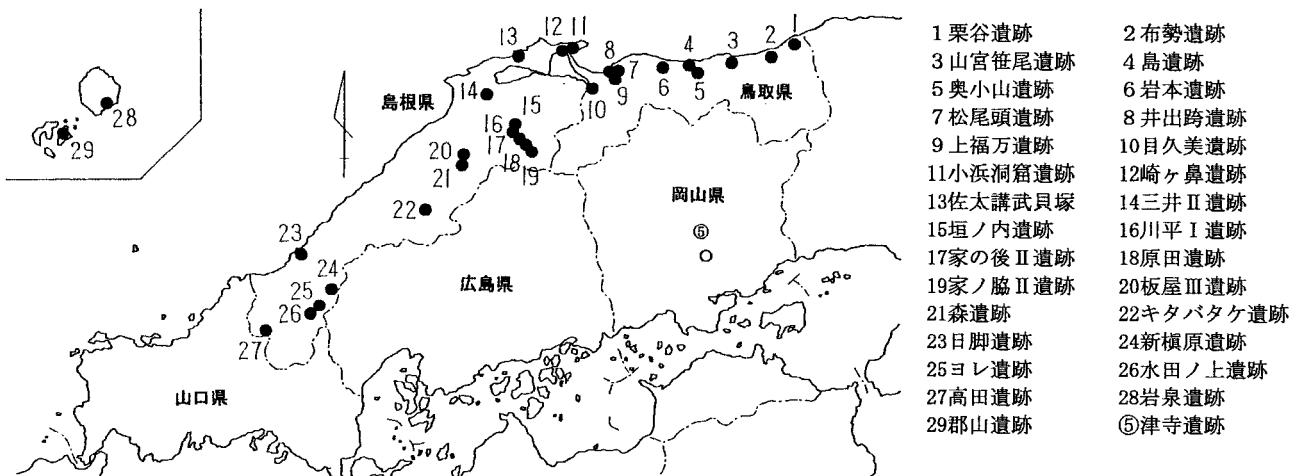
### 2. 石製玉類からみた交流

縄文時代後期中頃から晩期前半の山陰地方を中心に、石製玉類から交流の背景を考える。当該期の石製玉類は攻玉遺跡の分布・様相や石材原産地からみて、ヒスイ製玉類や一部の蛇紋岩製玉類は北陸を中心とする東日本系、「結晶片岩様緑色岩」製玉類は南九州を主体とする九州系に大別できる。

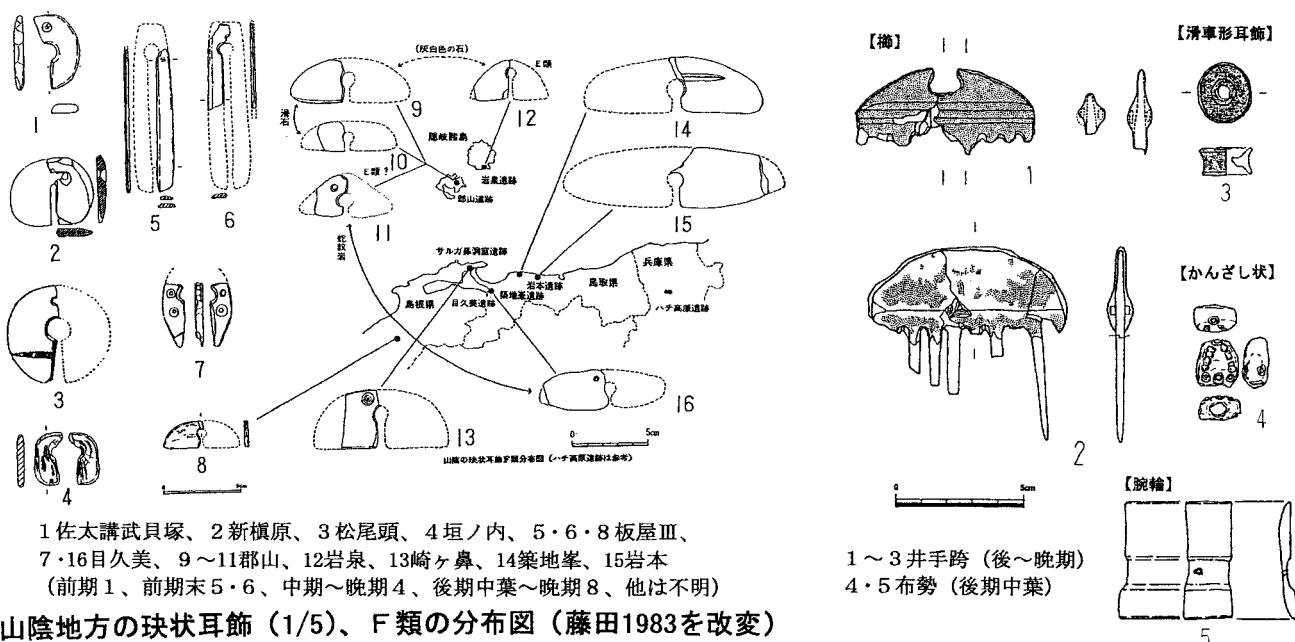
東日本系玉類は井出跨遺跡・水田ノ上遺跡で出土している。島根県東部の山間部に位置する神原I遺跡では加曾利B I式、板屋III遺跡では安行式土器、下山遺跡では中国地方で唯一となる屈折像土偶が出土しており、島根県東部で東日本（東北・関東・北陸地方）との交流がみてとれる。

一方、九州系玉類は川平I遺跡・水田ノ上遺跡・ヨレ遺跡・高田遺跡で認められ、特に島根県西端部に集中する。この地域は土器の視点から九州との強い結びつきが前期から継続的にあることがしばしば指摘されてきたが、「結晶片岩様緑色岩」製玉類が集中している状況からも同様のことが言及できる。なかでも高田遺跡では「結晶片岩様緑色岩」製玉類やその未成品・剥片が出土しているほか、石器石材は九州の腰岳産黒曜石を主体としているため、九州からの流通経路のみならず攻玉技術の伝播を考える上でも注目される。また九州系の鐘崎式・西平式土器は鳥取県東部でも出土しており、九州との交流は日本海を介して山陰地方全体にまで及ぶ。以上、当地方では濃密はあるものの、東日本・九州系の玉類のほか、他の遺物が搬入・模倣され、東西の文化が交錯することが確認できた。

- 【参考文献】 中原 齐 1999「第3章 縄文時代」『新修米子市史』第7巻 資料編考古・原始・古代・中世 米子市  
藤田富士夫 1983「縄文～古墳時代の玉製装身具」『季刊考古学』第5号 雄山閣  
米田克彦 2006「中国地方における縄文時代の石製玉類集成」『玉文化』第3号 日本玉文化研究会



山陰地方における縄文時代装身具出土遺跡の分布

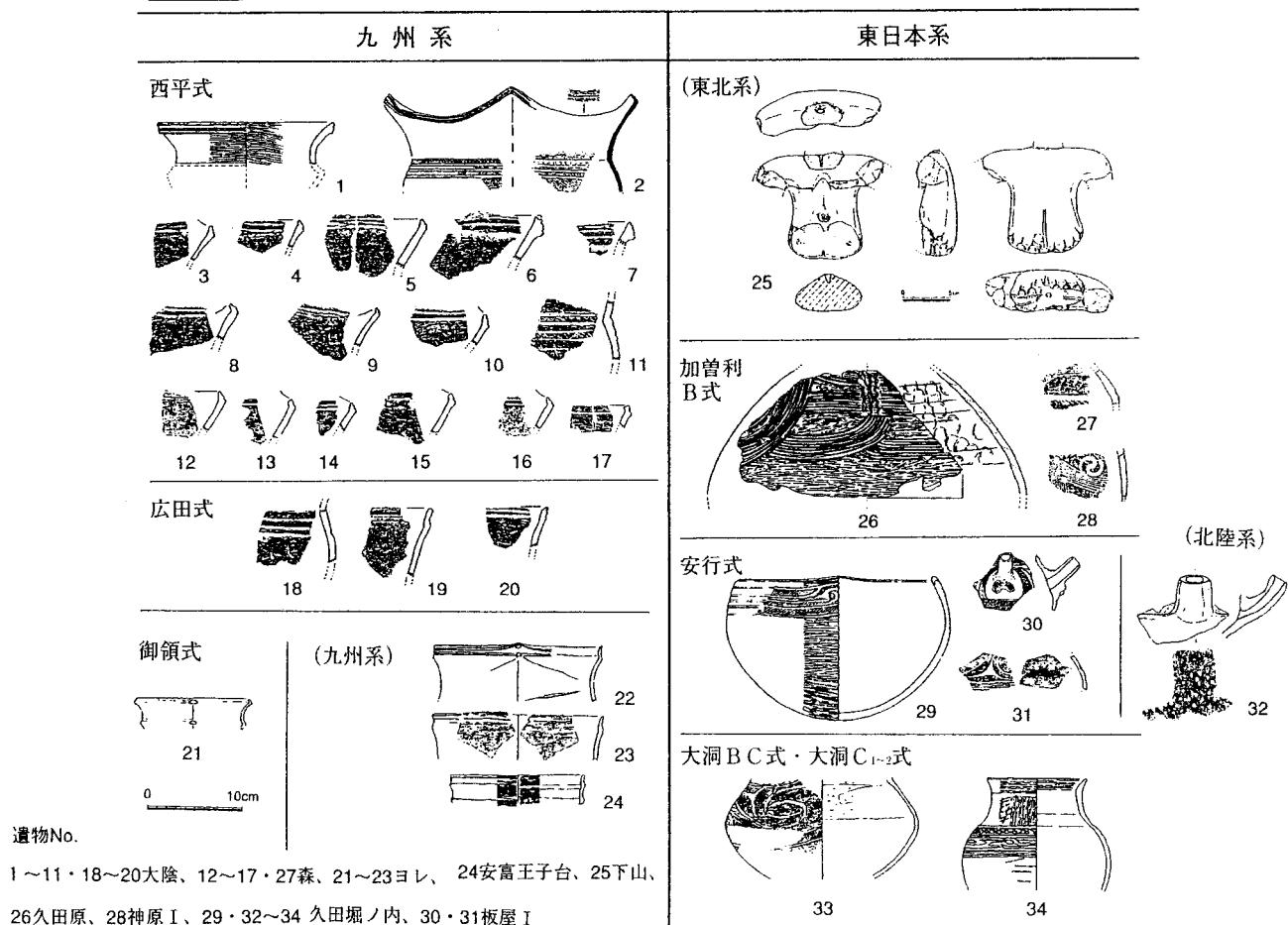
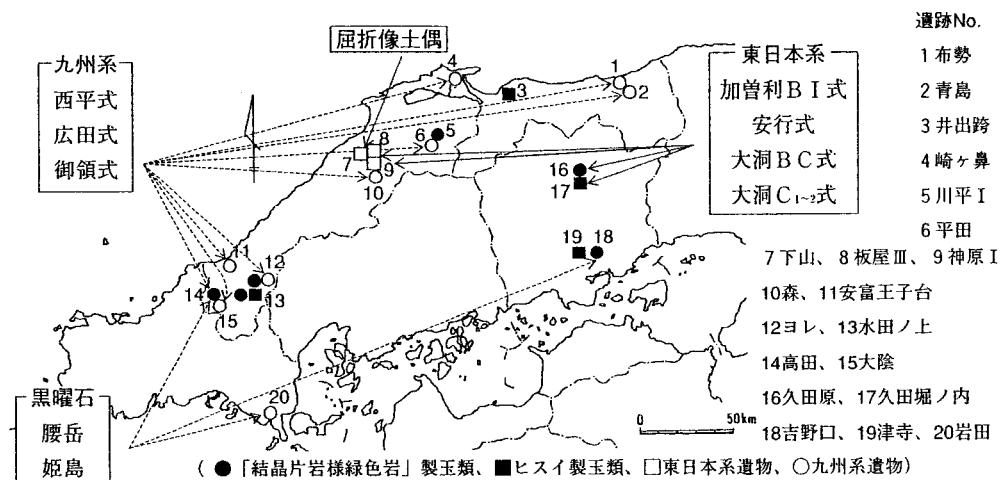


## 山陰地方における装身具の変遷

装身部位	貴石			非貴石			土		木		木(漆塗)		貝	歯牙		
	勾玉	管玉	丸玉小玉	玦状耳飾	「の」字状	丸玉小玉	垂玉	垂玉	耳飾	かんざし	櫛	耳飾	腕輪	腕輪	垂玉	
首	首	首	耳	首	首	首	首	耳	髪	髪	耳	腕	腕	耳首		
色調	●	(●)	(●)	△	(●)	△	△	△	□	□	□	■	■	■	▲	□
草創期																
早期								1								
前期					2			3							4	5
中期					6			7							8	9
後期	10	11	12		13		14	15	16	17		18			19	20
晩期																

1) 色調は緑色系を●、朱色系を■、白色系を▲、褐色系を□、灰色系を△で表す。(有彩色は黒塗り、無彩色は白抜き)

2) 時期が不明確な資料は、遺跡の状況から判断し、波線で示す。



中国地方における縄文時代後～晩期の東日本・九州系遺物の分布（遺物：1/8）



## 北陸（福井県）における縄文時代の装身具 —漆製品、石製品を中心として—

木下 哲夫（あわら市埋蔵文化財センター）

福井県は北陸の西部に位置し、旧国越前及び若狭の二国より成る。先ず、当該地域に於ける縄文時代の装身具の様相について概観すれば、早・前期の所産である越前の桑野遺跡と若狭の鳥浜貝塚の二者の出土例が突出し、凡そ中期以降については散発的事例の抽出に止まるとの現況にある。

桑野遺跡からは、調査区の中の限定された範囲に密集して分布した多数の土壌中から、略始源期と目される石製块状耳飾が別種の石製装身具等と組合ったりして多出し、予て別種の石製品は土壌毎に各々区分されて埋納とされた、従来の見解を覆すこととなった。その出土状態は块状品の対構成が近接して並置乃至重複の状況で検出された例が多く、対品の殆んどは同一の形状・石材を呈している。

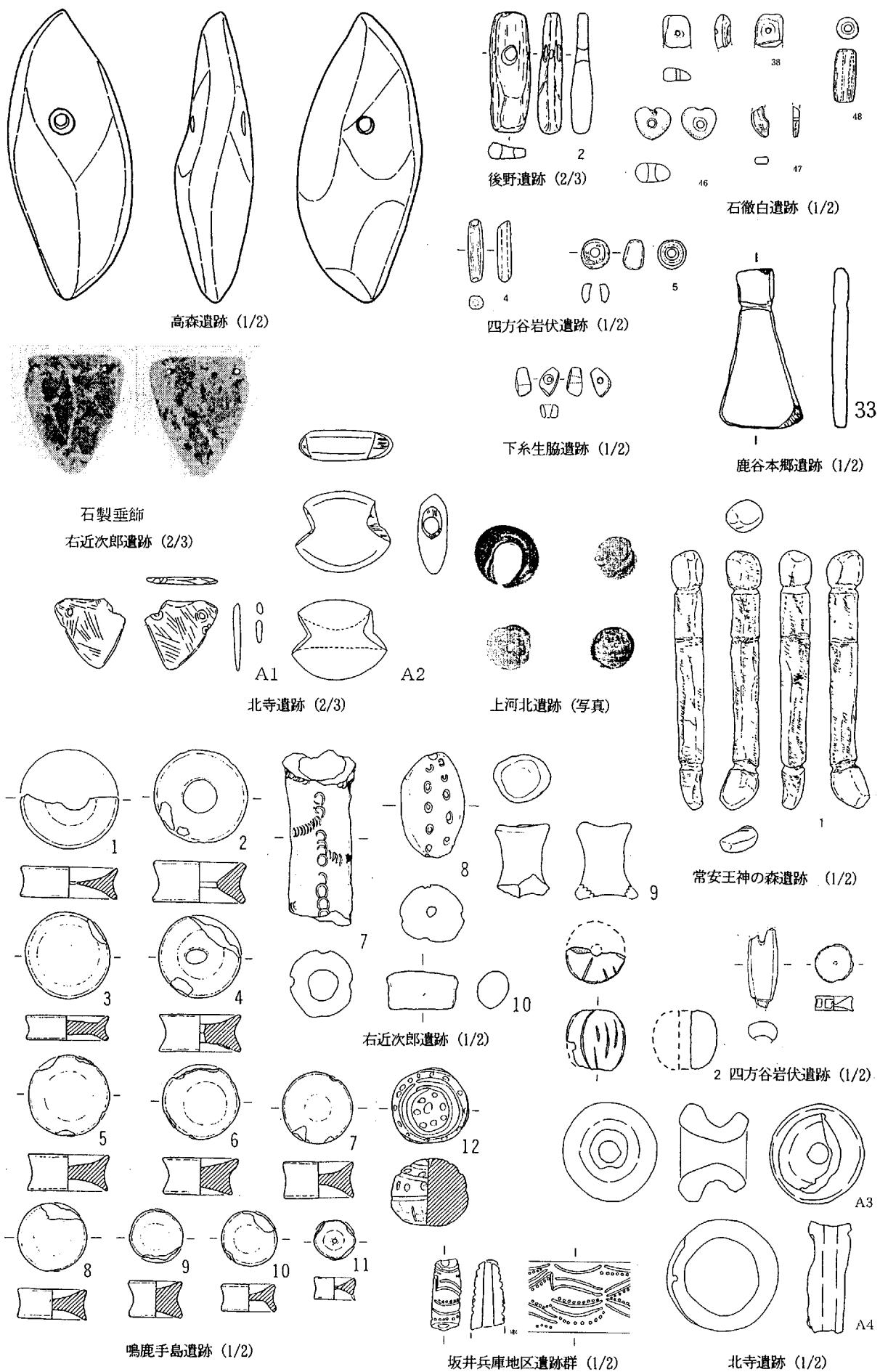
其の内略半数を占める茶褐色の滑石系材品は、形態が比較的均一な様相を示し、その類品を列島中央部等に見るに対し、白色材の品は対構成単位に個体差を保持し、多様性に彼我の類似が予々指摘されるものの、両者が同一遺跡で伴出する例、細身の環状品が列島中央では内国産様の材品を以って存することもまた注視する必要がある。これは、軟玉様を彷彿させる桑野18号品とは対照的事例とされるであろう。翻って、北海道に於ける道南と道東の漆製品分布の関係についても、該地の切目部側位穿孔例も相俟って、極めて示唆的な状況と考えられよう。また、切目部正反の穿孔は「環」の存在とも相俟って該品の使用例に対する疑義へと展開し、彼我に於ける材の同一性もまた指摘出来る。補修孔は精密に穿たれていて、その穿孔技術は何處で如何にして伝習され、用いられる工具はどのようであったろうか。更に、切目部の狭小性は装着法に対する疑義を生じ、二次葬の可能性が言及される因ともなった。端部の作出技法についても、大陸と同様の可能性が述べられたりもする。

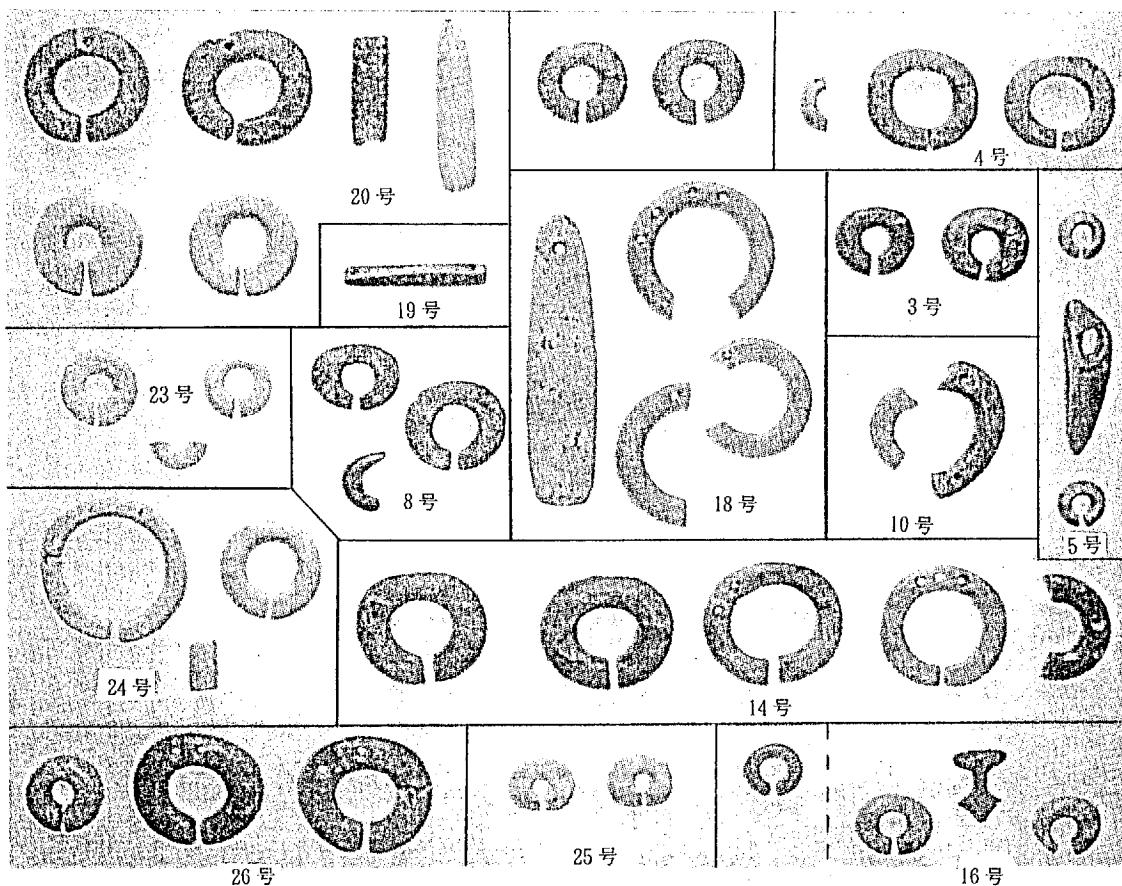
視点を管状品に転じれば、未だ列島にその類品はなく、彼我の対比が論じられている。然れど相互比較を行おうとする場合、形態と材の何れの視点に立脚するのかが肝要とされるであろうし、渡来・自生の何れの論に組みするかは中々に困難である。所謂璜状品や、刺突文を保持する管玉について論じる際もまた同様であり、そこでは原形を保つ例と転用例の峻別こそが鍵となろう。

こうした様相の桑野遺跡に対して、块状品としては後半期の所産とされる鳥浜貝塚例は、その殆んどが平面円形で断面扁平な品で、略2/3が結晶質石灰岩を材とする。それらの帰属時期は略北白川下層Ⅱ式期に収斂、その枠内で切目長の長大化と中央孔の小型化が時間的変位と看破された。中で後出とされる例や、別種の用途を想定される品には、蛇紋岩・頁岩・玉髓を混じえ、石材の差が工具に関連して、形態差へと連動する可能性が考えられる。他に鳥浜貝塚では、骨角製装飾品や貝輪も多数出土、ヤブツバキを材として赤色漆を全面に塗布する櫛、赤と黒の漆で描き分けられ多くトチノキを用いた盆状の木製容器や土器、桜の樹皮を巻いたり全面に赤色漆を塗った弓なども検出されている。

中期以降の例には、越前に石製大珠が2例ある。高森遺跡の硬玉製品は、不整形の鰯節形を呈する大型品であり、桑野例は蛇紋岩系？を用いた先のやや尖った橢円形の鰯節形を呈する中型品である。他に後野遺跡の例は、小珠の類とされようか。石製垂飾には逆二等辺三角形を呈し、サメ歯模造製品とも位置付けられる例があり、より後出のものとして翡翠製品も散見される。また、土製品には耳栓があり、鼓状・滑車形、有孔・無孔の各態様を示すものの、透かしが施されるような優品は存しない。その他装身具関連遺物の範疇と仮定するならば、一見両頭石棒のミニチュア風の石製品、土製の中空棒状品・球状品・柱状有孔品などの品も諸遺跡に散見される。

以上、福井県の状況を概観した。略石製品の現況報告に終始したことを、深くお詫び申し上げる。





桑野遺跡出土の石製品（約3/10）

（季刊考古学89号 2004より）

羽島下層II式				
北白川下層Ia式				
北白川下層Ib式		9 結晶質石灰岩	14 結晶質石灰岩	
北白川下層IIa式	10 結晶質石灰岩			
北白川下層IIb式	11 結晶質石灰岩			
北白川下層IIc式	13 蛇紋岩	15 頁岩	16 結晶質石灰岩	

鳥浜貝塚出土の玦状耳飾の共伴土器型式からみた位置づけ

（白川 2002より）



## 石川県における縄文時代の装い

西田 昌弘（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

### 1. はじめに

石川県では、1993年より「石川県考古資料調査・集成事業」の一環として、縄文時代装身具の集成を実施しており、2000年度までの出土品についてはその成果として『装身具 I』および『補遺編』にまとめられている。そのため、今回はそれら以降に、新たに確認された資料を追加集成した上で、県内における装身具の変遷と特徴についてみていくこととした。

### 2. 時期別にみた装身具の様相

対象となったのは計65遺跡から出土した総点数458点の出土品である。以上を報告に基づき時期別に分類した上で、各時期の器種組成比較等を行った（第1図、第2表）。

**早・前期：**装身具を組成する遺跡は、能登17遺跡に対し加賀7遺跡と、能登での出土傾向がつよい。特に石製品では块状耳飾の出土点数が突出しており、石製装身具の60.3%を占める。使用石材には粘板岩や流紋岩、ロウ石などがみられる他、出土点数の多い三引遺跡では新潟県糸魚川周辺を産出地とする不純石灰岩が確認されており、早期末～前期初頭という早い段階から、これら地域との交流・交易があつたことを窺わせる（第1表）。

**中 期：**遺跡数は能登10遺跡に対し、加賀11遺跡とほぼ均等化する。草・前期において石製装身具の中心にあった块状耳飾は4遺跡で5点みられる程度と減少する一方で、前段階には認められなかった大珠が6遺跡で12点確認でき、この時期に突出する様相を呈する。また、それに伴って使用石材もヒスイの割合が高くなる傾向が看取された。骨角歯貝製装身具は、この時期に比較的多く、上山田貝塚では貝輪の他、単孔のマガキ製垂飾やカワウソの下顎骨を用いた垂飾が確認されており、製作や使用素材の特徴から北海道～西日本地域との関連性が指摘されている。

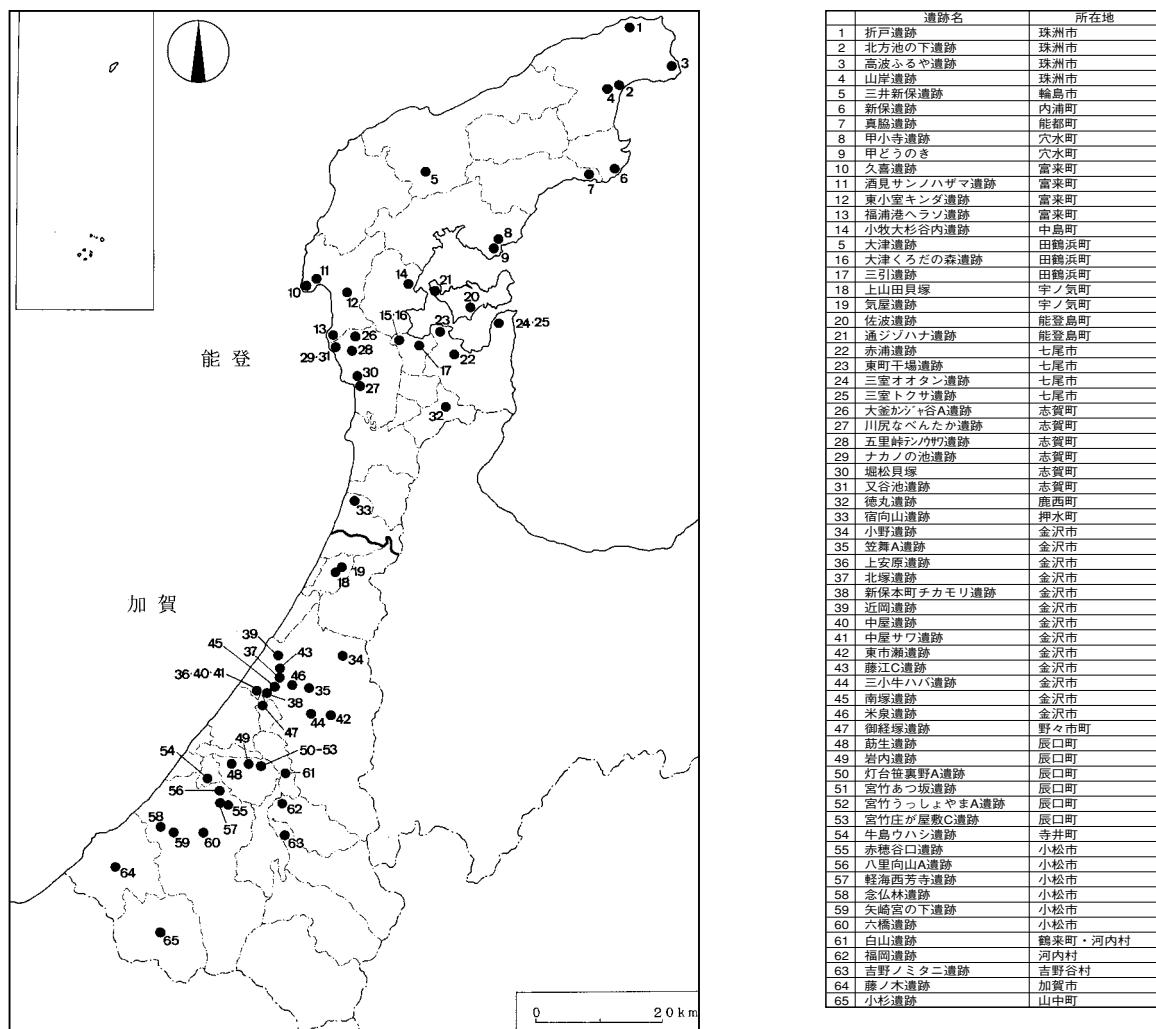
**後・晚期：**遺跡数は能登6遺跡に対し、加賀12遺跡と加賀での組成率が高くなる。特に金沢市・野々市町周辺において集中する傾向がみてとれる。石製装身具における組成の中心は、ヒスイないし含硬玉珪質岩製の比較的小型な丸玉等へ移行してくる。土製装身具は後期になると多様化し、加賀での出土数が多い。早期末～前期初頭には三引遺跡における結歯式櫛、中期には真脇遺跡における胸ないし腰飾りと单発的な出土傾向をみせていた漆塗装身具は、後・晚期に至り新保本町チカモリ遺跡や米泉遺跡などで櫛を中心に釧・管玉が組成するなど盛んな使用・製作がみられるようになる。

### 3. 三引遺跡における石製装身具の製作技法

块状耳飾や円盤状石製品について、出土したの未成品から「平面分割技法」ないし「立方体分割技法」により施溝分割した後、粗磨き、抉り技法による内側円孔部の作製、スリットの切り込み、仕上げ磨き、という製作過程の復元がなされている。また、スリットの切り込み方法については、スリット部に残された円弧状の平行擦痕から糸切技法による切り込みが想定されており、早期末から前期初頭の時期に、すでに石鋸技法と糸切技法の両者が併存していたことが指摘されている。

### 4. 漆製品の製作技法

三引遺跡出土の結歯式櫛を初源として、後・晚期に至り盛行する漆塗装身具は、近年の科学分析により、前・中期にはベンガラを赤色顔料に用いていたものが、後期には朱が使われ始めるようになり、またベンガラとの使い分けがなされ、多層塗による品質差が生じるようになることや米泉遺跡出土の釧ではクロメ漆の使用が想定されるなど、漆製品の多様な塗装工程が解明してきた。



第1図 石川県縄文時代装身具出土遺跡地図 (S=1/200,000)

(なお、遺跡所在地についてはおおよその位置関係が捉えやすいよう、市町村合併以前の行政区画に基づいて論をすすめたことをご了承願いたい。)

### [草・前期]

アブライド	滑石	滑石質	滑石石墨片岩	含石英細脈粘板岩	頁岩質粘板岩	石灰岩質粘板岩	粘板岩	輝石安山岩	凝灰岩
1	4	1	2	1	2	3	16	1	3
珪岩	珪質岩	結晶石灰岩	石灰岩	粘板岩質石灰岩	含綠泥石不純石灰岩	不純石灰岩	黒曜石	コハウ	蛇紋岩
1	1	2	7	6	1	23	2	1	2
真珠岩?	真珠岩?軟玉?	石英	石英質流紋岩	チャート・珪質岩	ヒスイ	メノウ質	流紋岩	流紋岩?軟玉?	軟玉?
1	2	3	2	1	5	1	15	2	1
口ウ石	口ウ石質	緑泥岩	不明	計					
4	6	2	11	136					

### [中期]

滑石	凝灰岩	玉髓	珪質岩	頁岩	蛇紋岩	石英質	石灰岩?	チャート	長石
3	6	1	1	2	3	1	1	1	1
泥岩	ヒスイ	ヒスイ質	メノウ	流紋岩	流紋岩質	口ウ石	口ウ石?	不明	計
1	17	1	1	4	1	4	1	6	56

### [後期]

滑石	凝灰岩	頁岩	頁岩?	頁岩質	細粒砂岩	砂岩?	中生代砂岩	珪質岩	含硬玉珪質岩
2	3	3	1	2	1	1	1	5	6
ヒスイ	ヒスイ質	メノウ	流紋岩	流紋岩質	蛇紋岩	石灰岩質	チャート	輝綠凝灰岩	粘板岩
13	7	1	1	1	4	1	1	1	1
緑泥岩質	口ウ石質	不明	計						
1	5	28	90						

### [晚期]

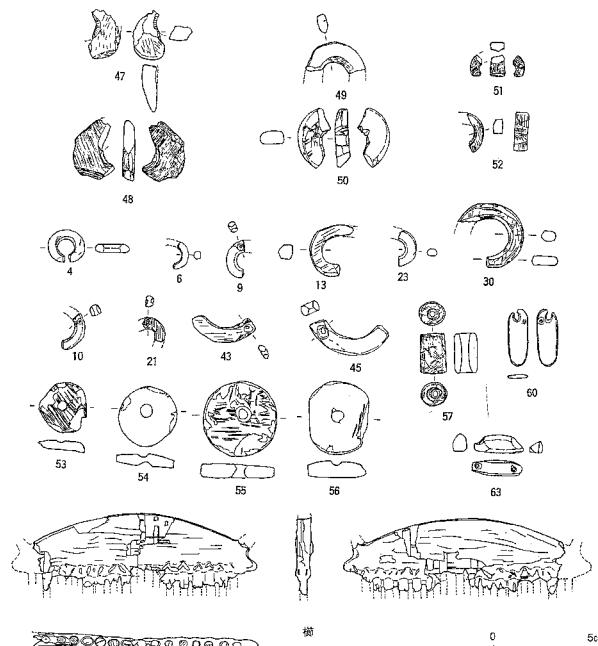
凝灰岩	蛇紋岩	石灰質粘板岩	石灰質岩	含硬玉珪質岩	ヒスイ	ヒスイ質	口ウ石?	口ウ石質	計
2	2	1	1	7	12	5	1	1	32

### [時期不明]

滑石	凝灰岩	蛇紋岩	蛇紋岩?	ヒスイ	流紋岩	不明	計
1	2	1	1	1	1	7	14

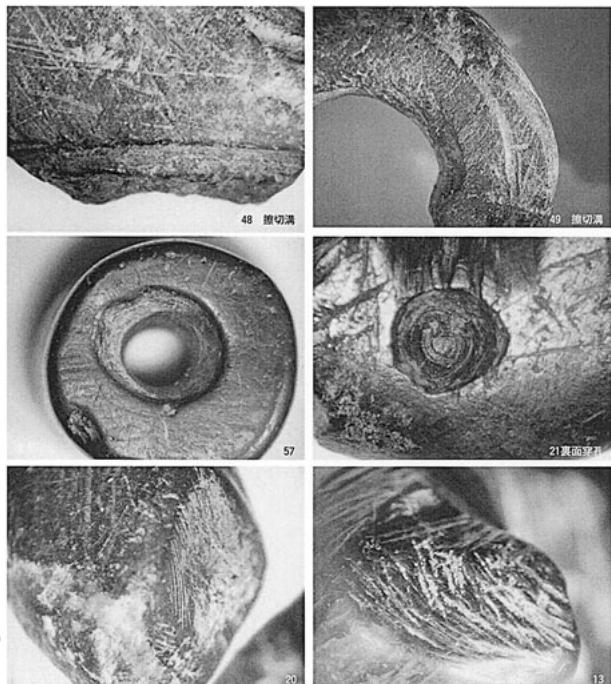
第1表 時期別石材組成表

第2表 時期別装身具組成表



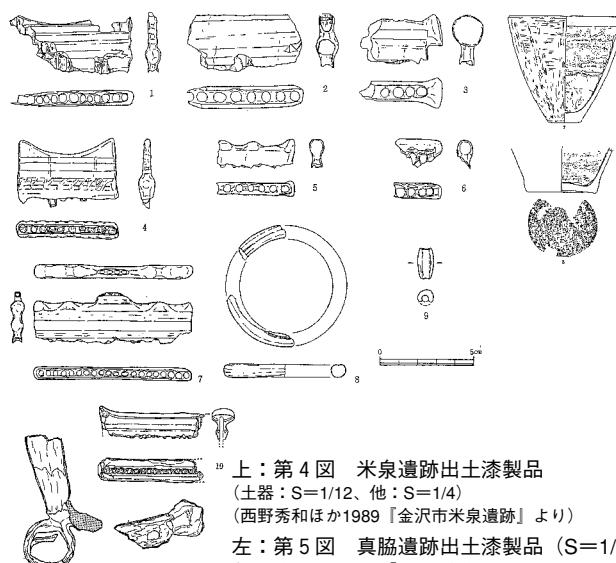
第2図 三引遺跡出土の装身具 (S=1/4)

(金山哲哉ほか2004『田鶴浜町三引遺跡III(下層編)』  
金山哲哉ほか2005『田鶴浜町三引遺跡IV』より)



第3図 三引遺跡石製装身具製作技法

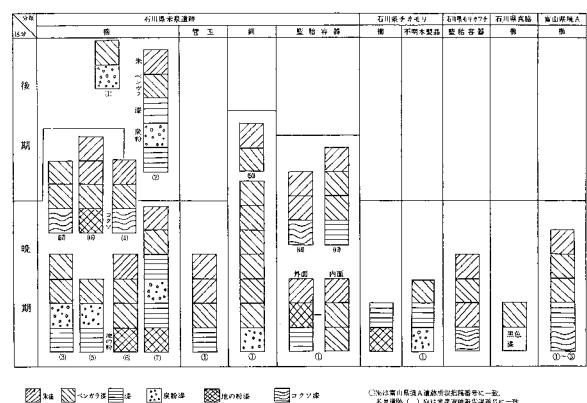
(小嶋芳孝2005「第3節 石製品について」『田鶴浜町三引遺跡IV』より)



上：第4図 米泉遺跡出土漆製品  
(土器: S=1/12、他: S=1/4)

(西野秀和ほか1989『金沢市米泉遺跡』より)

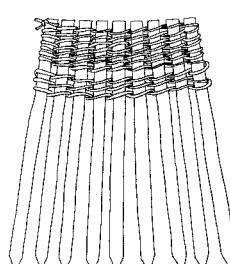
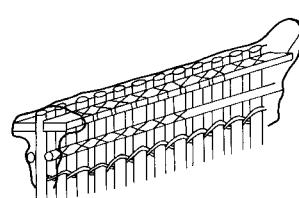
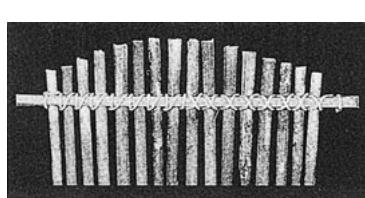
左：第5図 真脇遺跡出土漆製品 (S=1/4)  
(山田芳和ほか1986『石川県能都町真脇遺跡』  
高田秀樹ほか2002『石川県能都町真脇遺跡2002』より)



第6図 漆製品塗装工程模式グラフ

(四柳嘉草1995「漆塗装身具の製作技法」

『石川県考古資料調査・集成事業報告書 装身具I』より)



第7図 組歯式復元モデル

(左より 三引遺跡: 金山哲哉ほか2004『田鶴浜町三引遺跡III(下層編)』、

真脇遺跡: 山田芳和ほか1986『石川県能都町真脇遺跡』、

新保本町チカモリ遺跡: 山本直人・椎貝秋津1995「第4節 木製装身具」[石川  
県考古資料調査・集成事業報告書 装身具I]より)



## 富山県における縄文時代石製装身具

山本 正敏（財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所）

### 1. 早期末葉～前期

草創期～早期後葉は、遺跡の発掘例自体が少ないこともあって、石製装身具は確認されていない。早期末葉になって滑石・蠟石製の玦状耳飾や各種垂飾品の、製作と使用が確認できる。上市町極楽寺遺跡が代表的な製作遺跡である。同時期の朝日町明石A遺跡や立山町天林北遺跡などでも玦状耳飾の製作が行われている。初期の玦状耳飾の製作工程は、最初に原石を荒割りし、調整剥離と研磨を加えて円盤状のものを作る。続いて穿孔し、擦切りによって切れ目を入れて完成する。

玦状耳飾は、徐々に形態を変化させながら、前期を通じて作り、使用される。朝日町柳田遺跡は前期後葉の製作遺跡であるが、製作方法は極楽寺遺跡に比べると大きく変化し、円盤状素材への穿孔前あるいは穿孔作業と平行して切れ目を入れる工程となっている。これは切れ目のみ施されている製作初期段階の資料のほかに、穿孔部の上側（切れ目の反対側）にまで切れ目の跡が残っている資料で確認できる。

射水市（旧小杉町）南太閤山I遺跡では指貫型を含む玦状耳飾のほか、前期初頭の異形垂飾品が出土している。石製装身具の種類としては、そのほかに管玉状のものや様々な形態の垂飾品がみられるが、形態分類とその消長の検討は充分なされていない。装身具の中に含められると考えられるものに、立山町吉峰遺跡、朝日町柳田遺跡などから出土している、有孔磨製石斧（玉斧）がある。薄い磨製石斧状の体部の基部近くに穿孔されるもので、東北地方などにみられるような、先端が二股になるものや靴べら状のものはまだ見つかっていない。

### 2. 中期

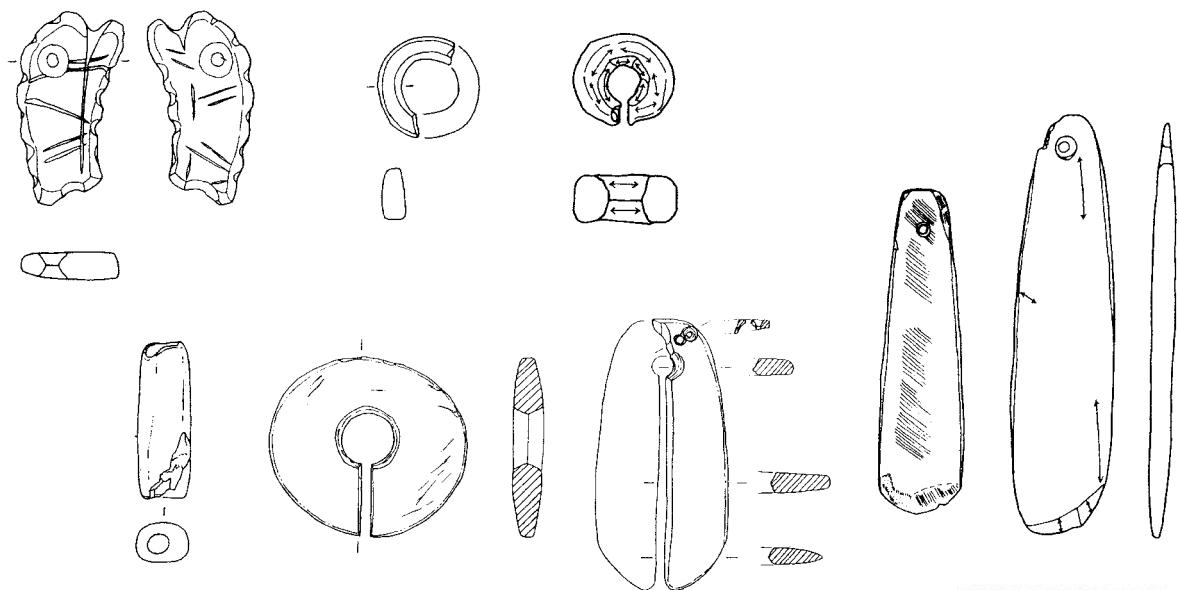
玦状耳飾は朝日町馬場山D・G遺跡などで中期前葉まで残る。また馬場山G遺跡では中期前葉にヒスイ製の玉類を製作し始める。中期中葉以降になると、ヒスイ製の大珠が出現する。いずれも表採品であるが、氷見市朝日貝塚、富山市北代遺跡、南砺市（旧平村）下梨遺跡などで鰯節型の大珠が発見されている。境A遺跡や糸魚川周辺の生産遺跡からもたらされた優品である。

拠点的な集落遺跡では、その他に滑石や蛇紋岩などを用いた各種垂玉類が出土する（立山町二ツ塚遺跡・富山市（旧大沢野町）布尻遺跡など）。勾玉状のものとしては、朝日町下山新遺跡のものが注目される。これは中期の可能性が高い。そのほか、砺波市（旧庄川町）松原遺跡では粘板岩の小扁平礫に穿孔した垂飾品が出土している。

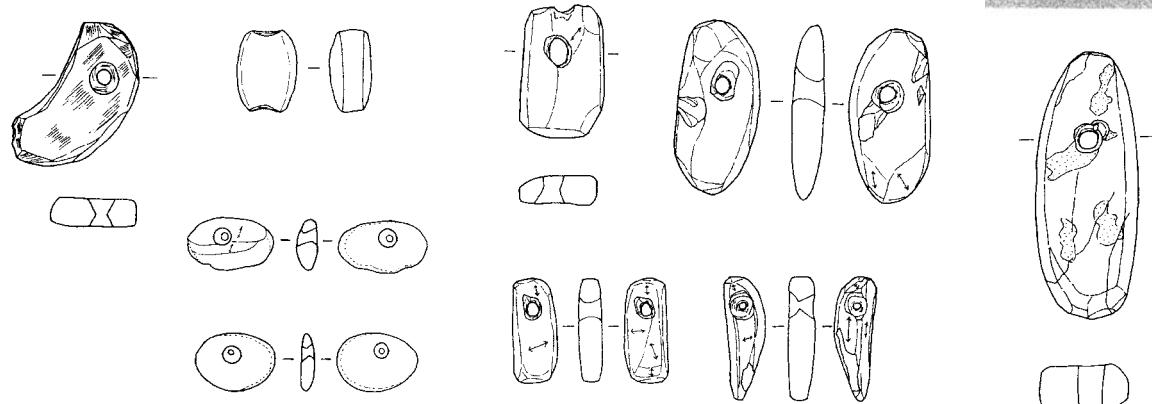
### 3. 後期・晩期

後期になるとヒスイの大珠は小型化し、中葉以降は垂玉類、丸玉類などと変わらない大きさになるものと考えられる。垂飾品は様々な形態のものが生み出される。代表的な遺跡として、朝日町境A遺跡や、富山市（旧大沢野町）布尻遺跡、小矢部市桜町遺跡などがある。なかでも境A遺跡は、ヒスイ、蛇紋岩、滑石などを材料に、勾玉・管玉・指輪状・垂玉・丸玉などの各種玉類とともに蛇紋岩製磨製石斧を大量生産し全国各地に流通させている。この遺跡の玉類・磨製石斧生産活動は晩期まで続くと考えられる。

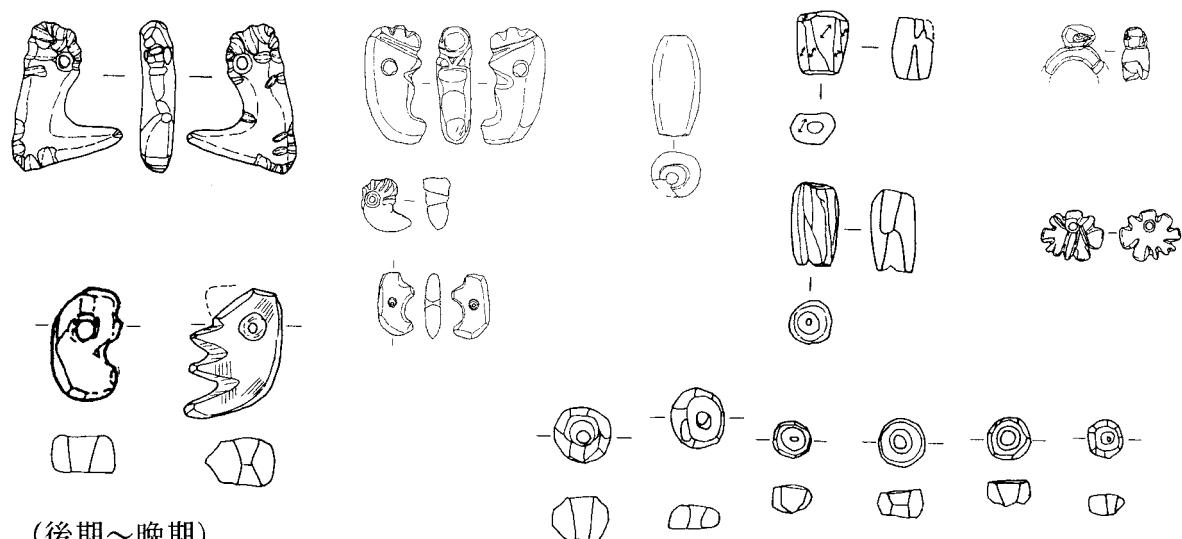
勾玉や丸玉は連珠状にして、首輪や腕輪にしたものであろう。東北や北海道では墓穴から副葬品としてまとまって出土する例が多く見られるが、富山県内ではまだ発見されていない。時期的には晩期に下るものが多いと考えられる。なお後期・晩期における装身具類の分類と時期区分や消長の確認なども、細かな時期比定の難しい資料が多いため、充分とはいえない。



(早期末葉～前期)

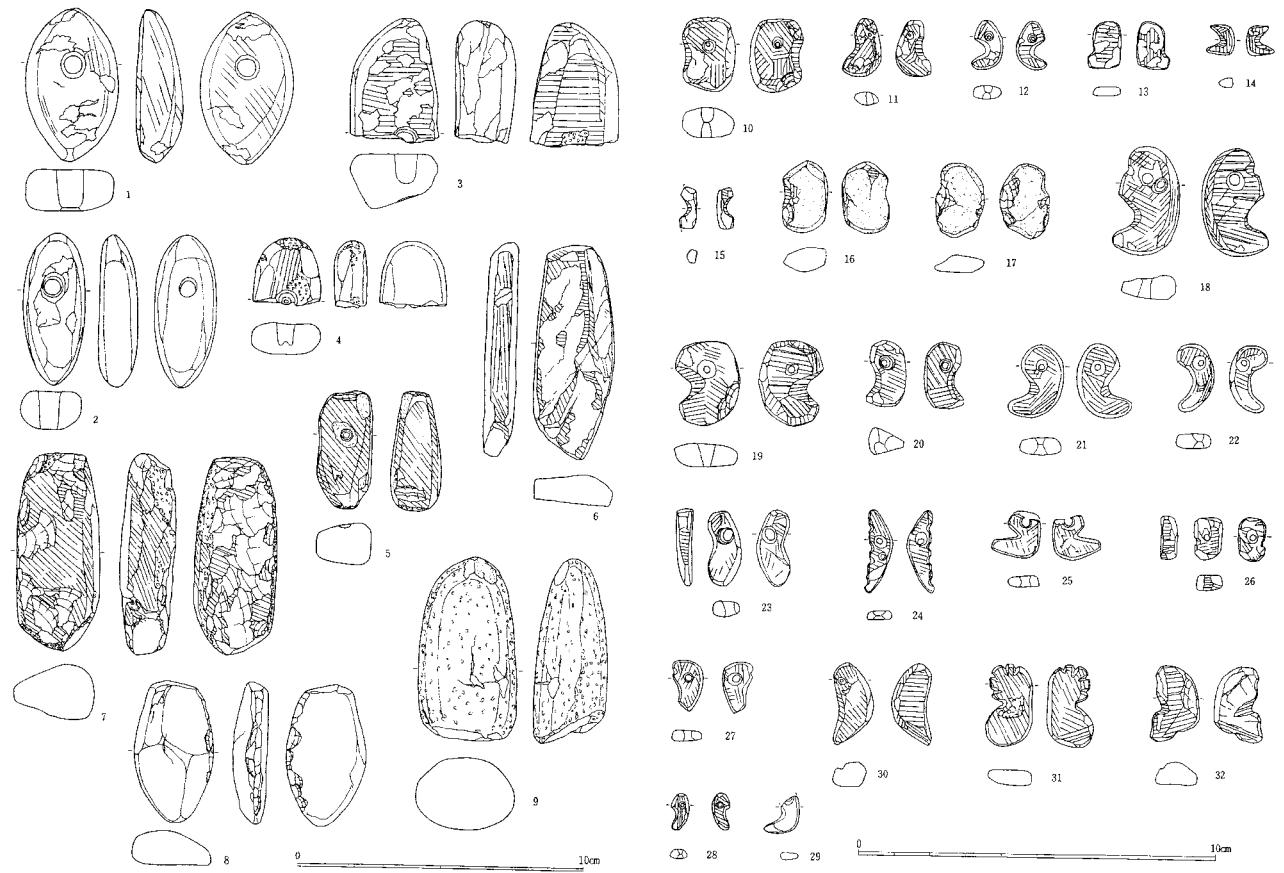


(中期)



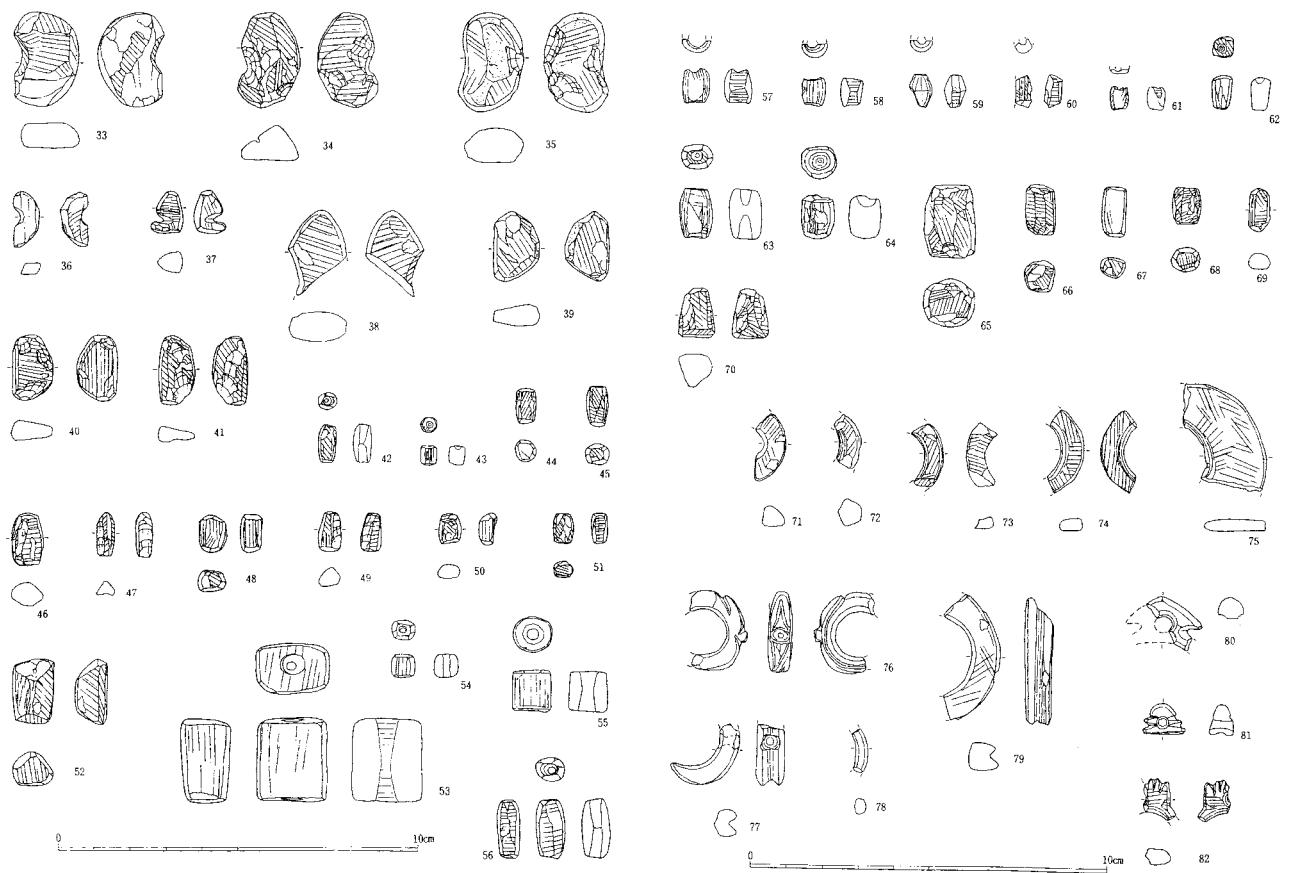
(後期～晩期)

第1図 石製装身具の変遷



玉類実測図1  
(1~9は硬玉製)

玉類実測図2  
(10~17は硬玉製)



玉類実測図3  
(42~52は硬玉製)

玉類実測図4

第2図 境A遺跡の玉類



## 新潟県における縄文時代の装身具

荒川 隆史（新潟県立歴史博物館）

### 1. 装身具の出土状況

新潟県内の縄文時代の装身具について、表採品を除き、発掘調査報告書に報告されている遺跡を中心に集成した。その結果、127遺跡で確認でき、点数は1,587点（一部未製品含む）である。内訳は石製823点、土製640点、琥珀製3点、貝製7点、鹿角骨歯牙製12点、漆塗木製102点である。

### 2. 漆製品

漆製品は8遺跡から出土し、櫛30点・糸製品47点・腕輪15点・耳飾3点・その他の装飾品7点がある。後期では棟部形態がアーチ形のものや台形のものが主体的で、朝日村元屋敷遺跡のような透かし孔を施すものが認められる。晩期では方形類が主体的で、後葉の新発田市青田遺跡では棟頂部両端に突起が発達するもので占められる。糸製品は前期の長岡市大武遺跡のものが最も古く、カラムシのような纖維芯に生漆とベンガラ漆を塗り重ね、これを2本撲りあわせているとされる。後期前葉の胎内市分谷地A遺跡のものは数本单位の糸を複雑に結んだもので、近接して出土した耳飾と連結していた可能性が指摘されている。青田遺跡では44点の赤漆塗り糸玉が出土している。植物纖維の束2本をZ撲りした糸にベンガラ漆を塗って漆糸を作り、これを15~20本を束ねて結び目をつけたものである。結び目の間隔を置かずに連続させるもの（A類）13点、間隔を空けるもの（B類）4点がある。塗装工程は漆糸の纖維上に直接ベンガラ漆1層を塗るもののか、漆層上にベンガラ漆3層を塗り重ねているものもある〔四柳2006〕。青田遺跡ではS5~S3層期（鳥屋2a式）に比べ、S2~S1層期（鳥屋2b式）では集落規模が拡大するものの、赤漆塗り糸玉と腕輪状漆製品は減少しており、縄文時代終末期の様相を示す、あるいは祭祀形態の変化によるもの、などが考えられる。

### 3. 石製品

石製品は、玦状耳飾72点、大珠49点、小珠24点、管玉35点、丸玉197点、臼玉44点、勾玉29点、垂玉182点、指輪状玉類3点、有孔石製品57点、その他の玉類23点、その他の装飾品21点である。早期末葉から前期初頭の津南町下モ原遺跡では、楕円形で孔部径の大きい玦状耳飾と断面エンタシス状の管玉がある。前期後葉の上越市古町B遺跡では、孔部径の小さな正円ないし楕円形の玦状耳飾およびその未成品と、断面鼓形の管玉・臼玉・垂玉が出土している。前期終末～中期初頭の新潟市南赤坂遺跡では、玦状耳飾・「の」字状石製品・玉斧・垂玉が出土し、中期初頭の上越市和泉A遺跡では、縦長の玦状耳飾・断面骨状の管玉・翡翠製大珠がある。いずれも各時期の特徴を示している。中期では上越地域で糸魚川市長者ヶ原遺跡などの翡翠製玉類の生産遺跡が数多くある。翡翠製品は信濃川中流域を中心に出土するが〔木島1999〕、大規模遺跡でも大珠や玉類自体が少ない遺跡があり、分布や流通形態を検討する上で注目される。後晩期には大珠などの大形玉類に代わり、丸玉・臼玉・勾玉・垂玉などの小形品が増加する。朝日村元屋敷遺跡では213点認められ、その多くが配石墓などの墓坑から出土している。また、不整形に整えた石材や自然礫に2孔を穿つ有孔石製品とも呼ばれるものが目立つようになる。それぞれ形態は異なるものの、孔の間隔はほぼ共通しており、垂玉などの装飾品と考えられる。このほか、阿賀野市六野瀬遺跡、長岡市藤橋遺跡、和泉A遺跡、青田遺跡で細形の管玉が出土しており、注目される。青田遺跡では原産地分析の結果、碧玉製管玉（549）は佐賀県牟田辺遺跡、丸玉（540）は鹿児島県上加世田遺跡と同グループの可能性が高く、西日本との流通が指摘されている〔藁科2004〕。後晩期の広域的な流通を探るために、翡翠製品以外の産地分析が有効となろう。

表1 新潟県内の装身具出土遺跡一覧

遺跡名	所在地	時期	石製	琥珀製	土製	貝製	骨製	木製	遺跡名	所在地	時期	石製	琥珀製	土製	貝製	骨製	木製
アチャ平	朝日村	前～後	6		29				居平	魚沼市	晩	1					
落合向い	朝日村	前・後	1						清水上	魚沼市	早～後	7		4			
下ゾリ	朝日村	前～後	1						黒倉十文字	十日町市	中	1					
本道平	朝日村	前～晩	1						笹山	十日町市	中	3		22			
元屋敷	朝日村	後～晩	248		56		2	10	寿久保	十日町市	前～後	4		1			
道端	荒川町	後～晩						1	野首	十日町市	中～後	4		10			
二軒茶屋	胎内市	前	7		1				森上	十日町市	前～中			2			
分谷地A	胎内市	後			1			10	洗峰E	津南町	前	2					
青田	新発田市	晩	19		2			67	牛肥原	津南町	中	1					
館ノ内D地点	新発田市	晩	1		2				下毛原III	津南町	早～前	7					
二タ子沢A	新発田市	前～中	9		3				道尻	津南町	早～前	1					
二タ子沢C	新発田市	後			1				道尻手	津南町	前～後	6		13			
村尻	新発田市	後～晩	16		33				道平	津南町	中	2		5			
御井戸	新潟市	後～晩	1					1	道下	津南町	晩			1			
大沢	新潟市	前～中	1		5				大原	塙沢町	早～後			2			
鳥屋	新潟市	晩	3		3				五丁歩	塙沢町	早～後	4		2			
豊原	新潟市	中			8				原	塙沢町	中～後	8		3			
南赤坂	新潟市	前～中	7		1				和泉A	上越市	縄～弥	14	1	6			
ツベタ	阿賀野市	中			2				大イナバ	上越市	中～後	3					
藤堂	阿賀野市	後	2		3				大久保	上越市	中			1			
萩野	阿賀野市	中～後			1				大塚	上越市	早～後			2			
横峯B	阿賀野市	中			2				籠峰	上越市	後～晩	27		93	1	1	
六野瀬	阿賀野市	晩	3						蟹沢	上越市	不明			1			
北野	阿賀町	前～後	7		8				蜘蛛ヶ池	上越市	前～晩	1					
長者屋敷	阿賀町	晩			1				黒田古墳群	上越市	前～中	1					
大藏	五泉市	中			5				顯聖寺	上越市	早～晩	3		2			
川船河	田上町	後～晩			1				小丸山	上越市	後～晩	19		113			
保明浦	田上町	晩			2				十二平	上越市	中～後	12					
赤松	三条市	後～晩	1		1				炭山	上越市	後			1			
上野原	三条市	晩	1						戸々島	上越市	前～晩			2			
長畑	三条市	晩	2						長峰	上越市	中～後	7		4			
長野	三条市	中～後	1		2				平畠	上越市	中～後	1					
八幡平	三条市	後	2						古町B	上越市	前	15					
藤平A	三条市	縄～弥	2						前原	上越市	早～晩	1					
吉野屋	三条市	中～後			17				松ヶ峯	上越市	早～後	1					
羽黒	見附市	中～後	1						丸山	上越市	前	3					
耳取	見附市	中～晩	1		1				南田	上越市	晩			1			
山崎A	見附市	中	1						峯山B	上越市	前	1					
朝日	長岡市	晩	6						山屋敷I	上越市	中	11		3			
岩野原	長岡市	中～後	4		1				上ッ平	妙高市	中～晩			1			
牛池	長岡市	後			1				兼侯	妙高市	中～後	2					
馬高	長岡市	中	6	1	6				道灌	妙高市	前	2					
上向	長岡市	前	2						松山A	妙高市	中～後	2					
延命寺ヶ原	長岡市	晩	1		1				道添	妙高市	前～中	1					
山下	長岡市	中～後			1				葎生	妙高市	後～晩	9		70			
三十稻場	長岡市	後	24		1				岩野下	糸魚川市	前～後	2					
外新田	長岡市	中			4				五月沢B・C	糸魚川市	早～中	1					
大武	長岡市	前・晚						2	五月沢	糸魚川市	早～前	8					
多賀屋敷	長岡市	中～後	3		4				大角地	糸魚川市	前	38					
栎倉	長岡市	中			16				長者ヶ原	糸魚川市	中～後	75					
中道	長岡市	中～晩	18		20				寺地	糸魚川市	中～晩	31		3		8	
根立	長岡市	後			2			2	中原	糸魚川市	前～中	5					
藤橋	長岡市	晩	24		3				原山	糸魚川市	縄～弥	3					
南原	長岡市	中	1		11				細池	糸魚川市	晩	1					
室谷洞窟	長岡市	前	1						三屋原B	糸魚川市	前～中	2					
タテ	出雲崎町	中			1				三屋原	糸魚川市	前～中	2					
十三本塚北	柏崎市	後	1		2				四割・杉沢	糸魚川市	前～中	3					
雨池	柏崎市	中	1						長者ヶ平	佐渡市	前～後	3		6			
刈羽大平	柏崎市	後～晩	5						堂の貝塚	佐渡市	中			5			
田塚山群	柏崎市	中	1						二反田	佐渡市	縄～弥	3					
小丸山	柏崎市	後	10		1				藤塚貝塚	佐渡市	中	3		7	4		
屁振坂	柏崎市	中	1						矢田ヶ瀬	佐渡市	中			1			
城之腰	小千谷市	中～後	11						吉岡惣社裏	佐渡市	前～中	1					
百塚東E	小千谷市	早～晩			1												

石製装身具には、玦状耳飾・大珠・小珠・管玉・丸玉・臼玉・勾玉・垂玉・指輪状玉類・その他の装飾品がある。琥珀製装身具は玉類のみである。土製装身具は、耳栓・玦状耳飾・丸玉・勾玉・垂飾・環状土製品・有孔円筒状土製品・腕輪状土製品・その他の土製装飾品がある。貝製装身具は貝輪・その他の装飾品がある。骨製装身具には鹿角歯牙製を含み、垂飾などがある。木製装身具には、漆塗りの管玉・腕輪・櫛・耳栓・その他装飾品がある。

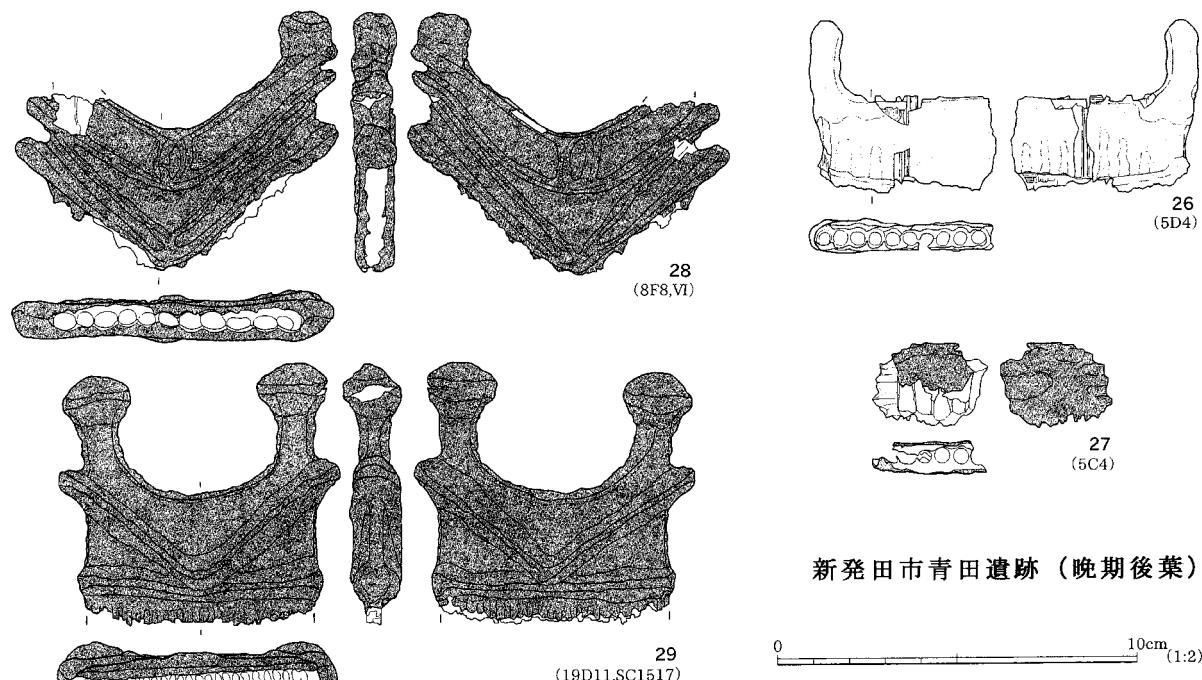
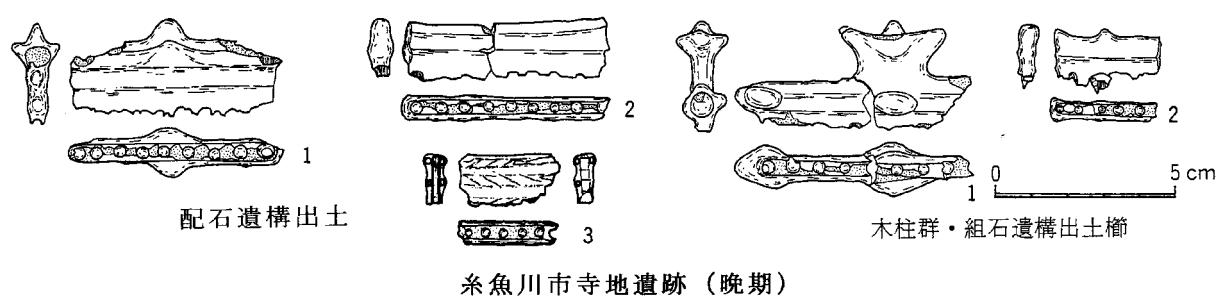
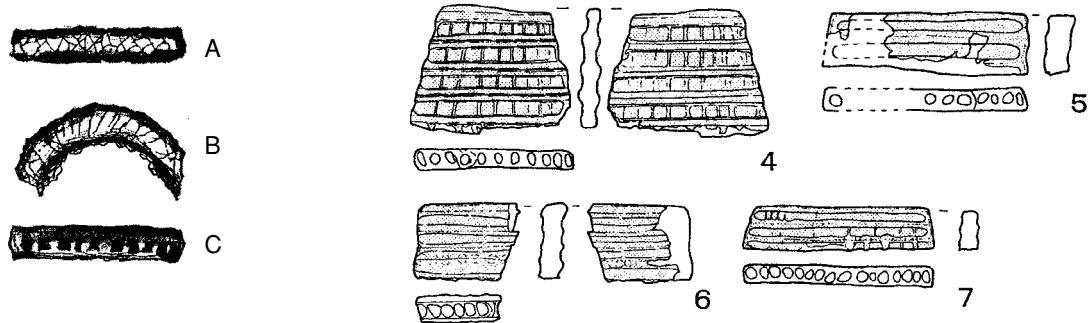
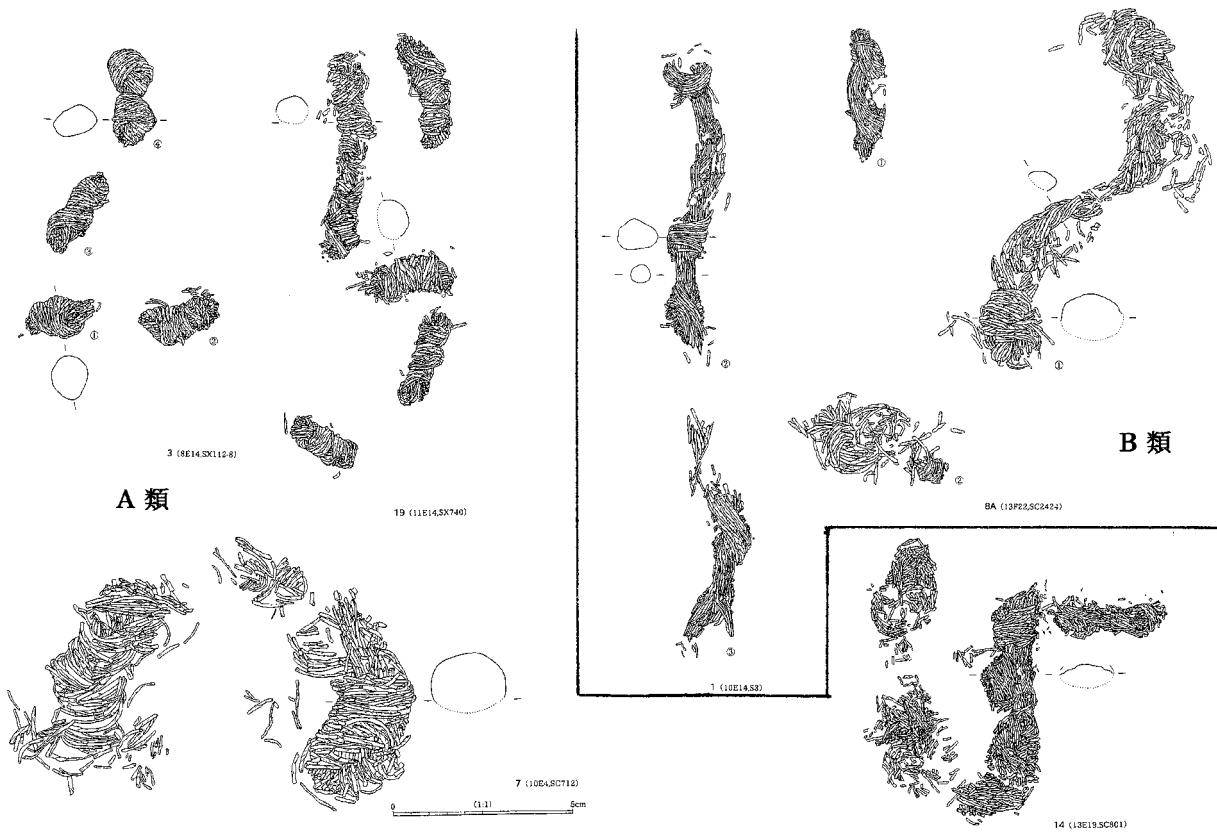
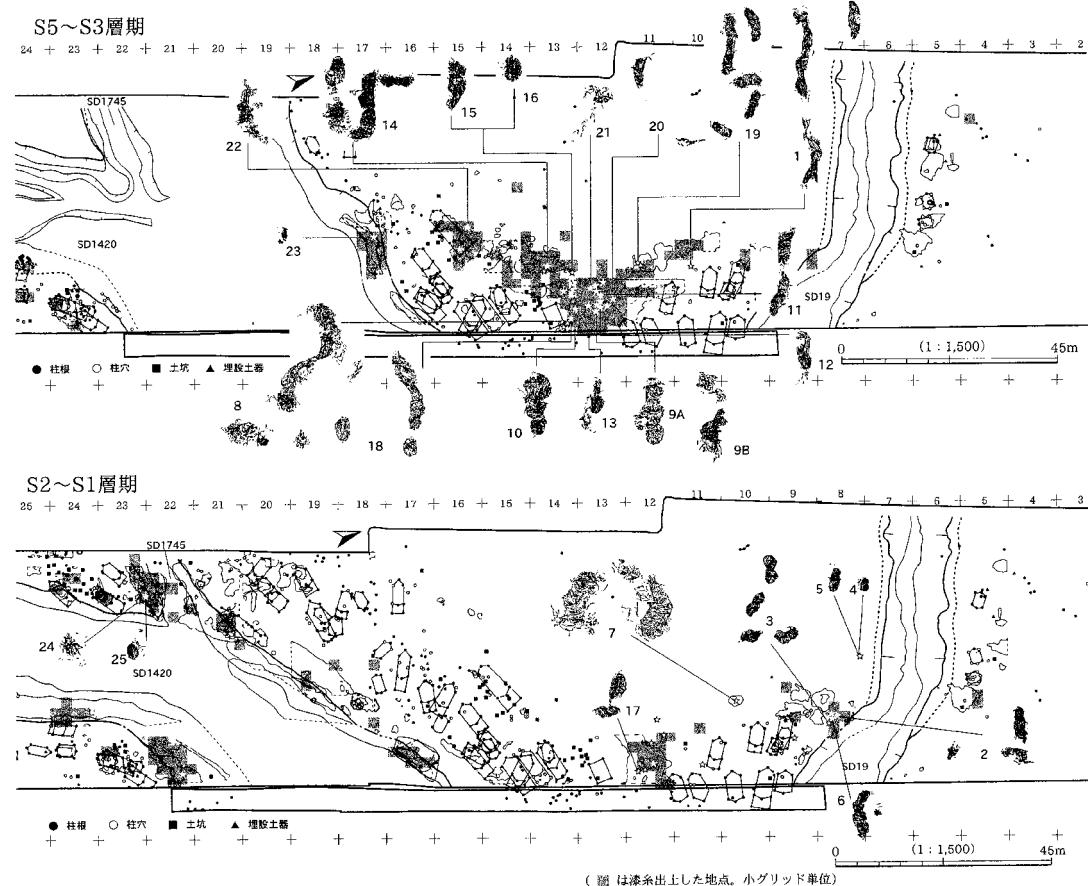


図 1 漆製品① 壇櫛

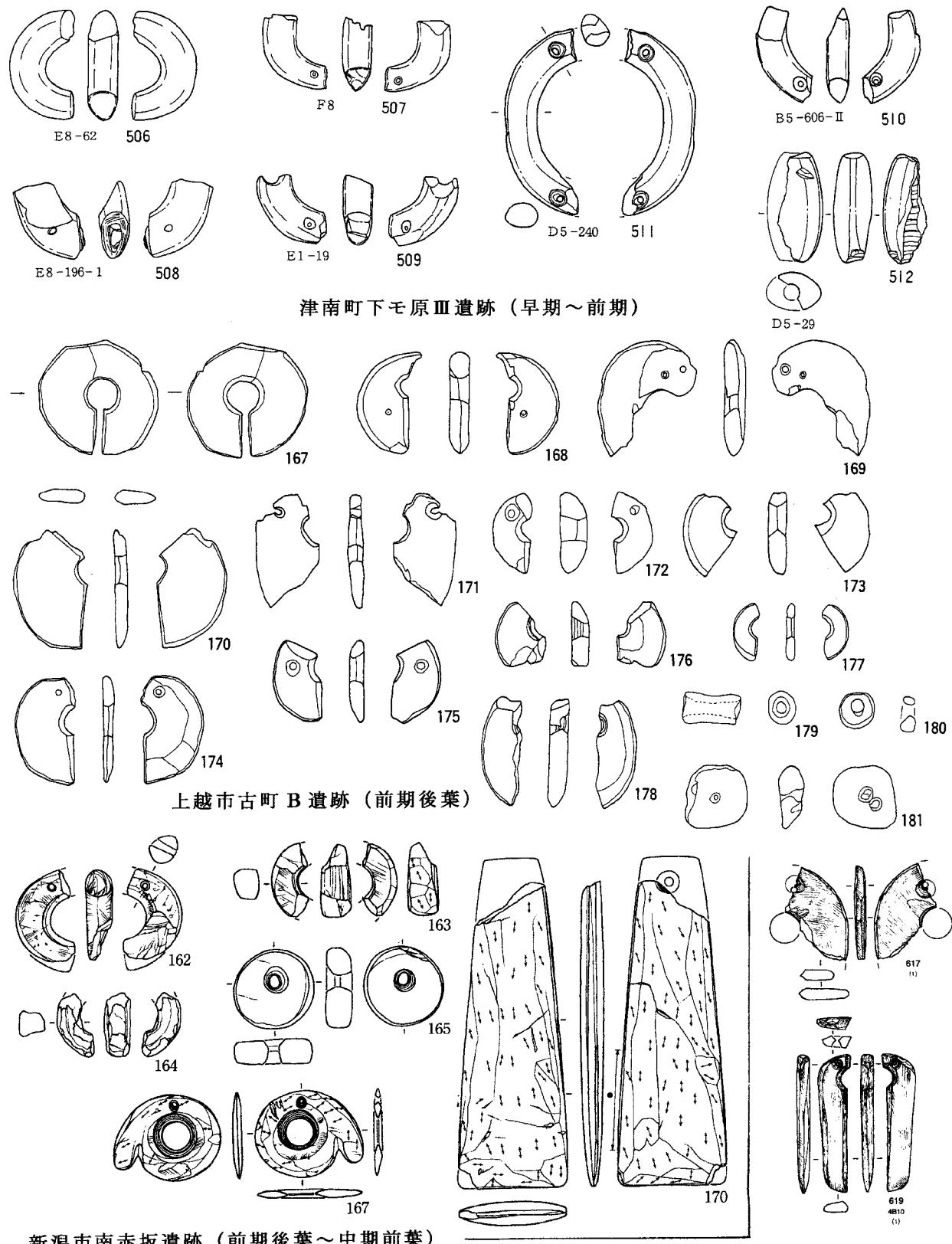


### 新発田市青田遺跡の赤漆塗り糸玉（晚期後葉）



## 赤漆塗り糸玉の分布

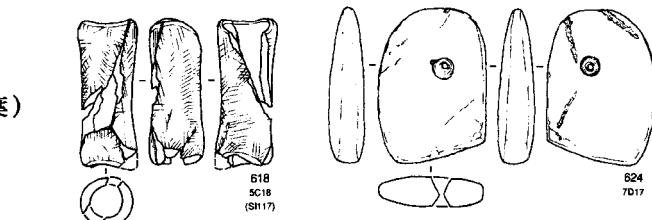
図2 漆製品② 赤漆塗り糸玉

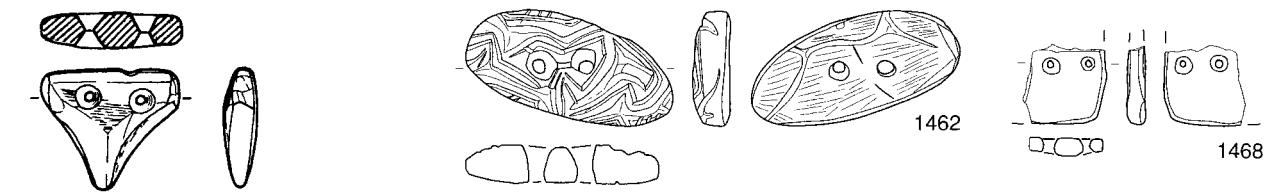


上越市和泉A遺跡（中期前葉）

0 5(cm)

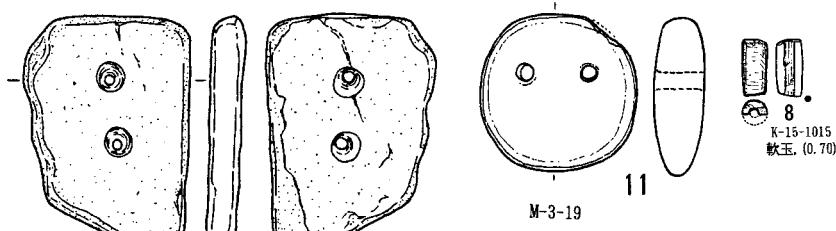
図3 石製品①



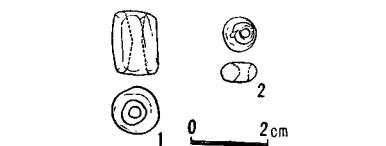


上越市蜘蛛ヶ池遺跡（晩期）

朝日村元屋敷遺跡（後・晩期）



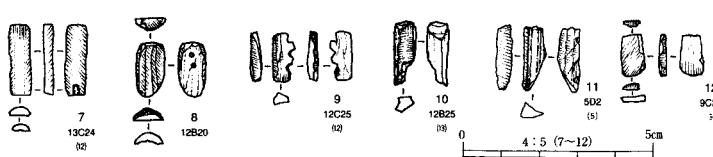
長岡市中道遺跡（晩期中葉）



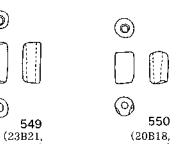
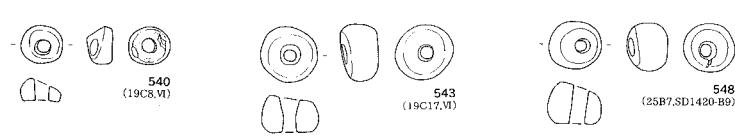
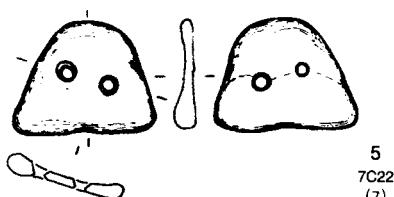
三条市長畠遺跡（晩期後葉）

27 28

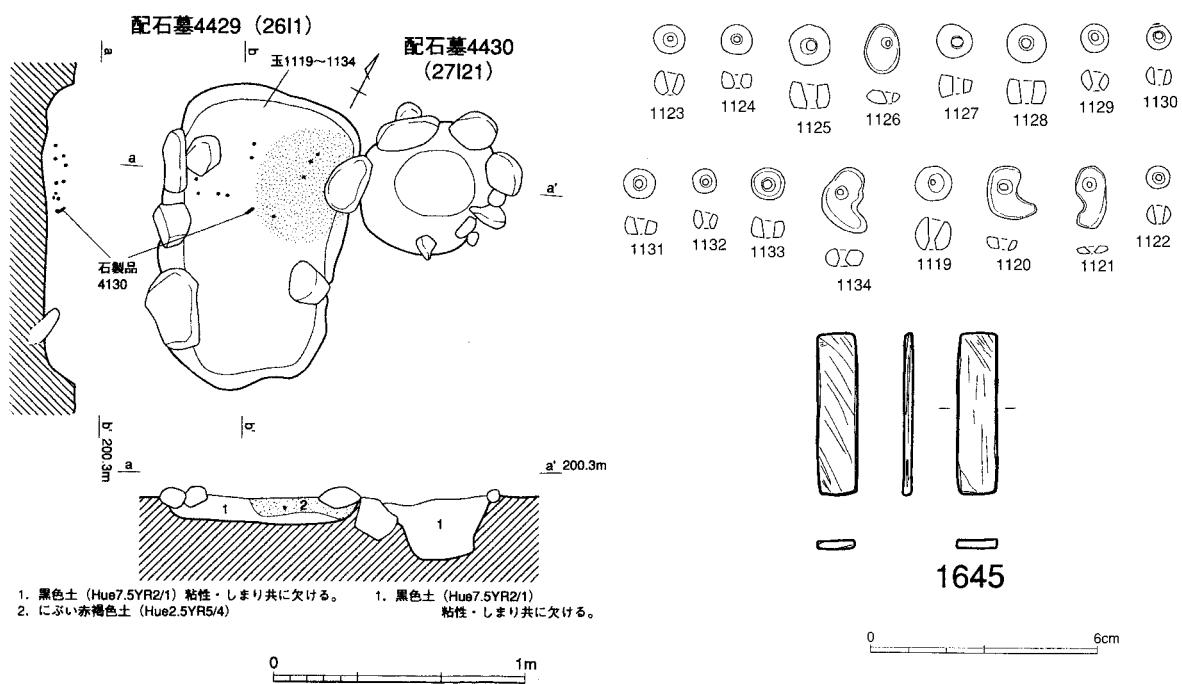
長岡市藤橋遺跡（晩期）



上越市和泉A遺跡（晩期後葉～弥生前期）



新発田市青田遺跡の遠隔地石材による玉類



朝日村元屋敷遺跡の配石墓から出土した装身具（後・晩期）

図4 石製品② 後期～晩期



## 縄文時代の装身具「東北」 —漆製品・石製品を中心として—

小林 克（秋田県埋蔵文化財センター）

漆塗りは木胎だけではなく、さまざまな素材を用いた工芸品に施されるが、縄文時代には纖維製品を胎として漆を施した例がある。近年、日本海側の縄文時代の遺跡、特にその後半の遺跡での出土例が増加する傾向にあるが、その状況を概観したい。

### 赤漆塗りの纖維製品

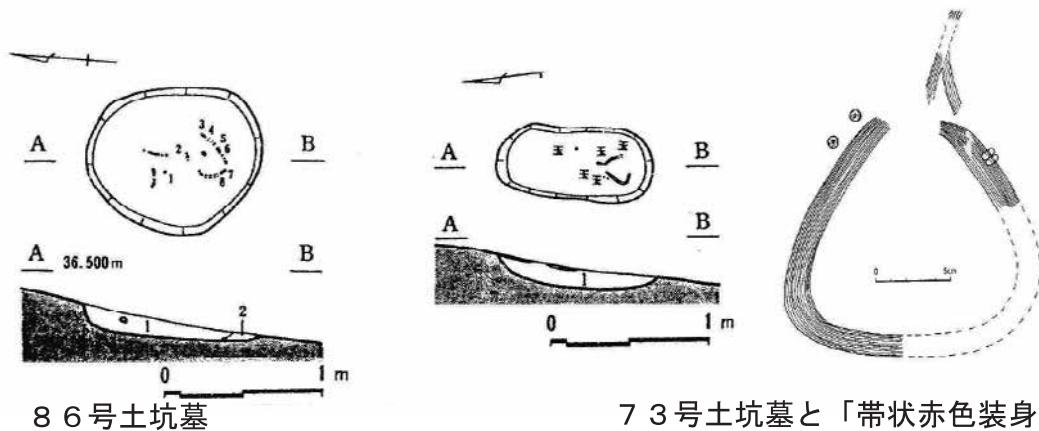
現在のところ、漆が塗られた纖維製品のうち最も古い時期のものは、北海道函館市垣ノ島B遺跡の赤漆を塗った糸で編んだ装飾品である。縄文時代早期貝殻文期の製品で土坑内の埋葬遺体が身に着けた衣服に縫い付けられたものと考えられている。その後、前期の例として標津町伊茶仁チシネ第1堅穴群遺跡の土坑墓から出土した首飾り、および腕飾りの纖維製品にも赤漆がかけられている。前期には北海道以外でも纖維製品に赤漆がかけられた例が確認されており、新潟県長岡市大武遺跡では塊状になった赤漆塗りの糸束が出土している。本州側では中期の段階でさらに出土例は広がり、滋賀県栗津湖底遺跡でも赤漆塗りの紐状製品の断片が出土している。

中期までに確認されている赤漆塗りの纖維製品は、基本的に撚り合わせた纖維に漆を塗りそれを束にして装身具としたものであるが、後期に至って装飾品としての形に変化が現れる。北海道小樽市忍路土場遺跡、同余市町安芸遺跡、秋田県北秋田市漆下遺跡、山形県遊佐町小山崎遺跡、新潟県黒川村分谷地遺跡などでは、赤漆塗りを塗った糸を直径数ミリ～10数mmに巻き上げた製品が出土している。地域によってさまざまな巻き上げ方があるが、ボタン状に仕上げた製品は衣服の装飾などに用いられた可能性が高い。後期末から晩期には撚りのかけられていない比較的太い纖維に赤漆をかけ、それを束にした製品が北海道や青森県を中心に見られるようになる。北海道恵庭市カリンバ3遺跡ではこのようにして作られた「腰飾り帯」が、土坑墓内から複数の赤漆塗りの飾り櫛とともに出土している。また、青森県六ヶ所村上尾駿（1）遺跡C地区、青森市朝日山（2）遺跡、同平野遺跡では、赤漆塗りの纖維を束にした首飾り状の製品が土坑墓内から出土している。晩期末には阿賀野川を中心として地域で撚った糸に赤漆をかけ、それを束として所々に結び目を作った製品が出土している。新潟県加治川村青田遺跡や福島県三島町荒屋敷遺跡にそうした製品の出土例がある。

### 晩期の赤漆塗纖維製品と石製小玉

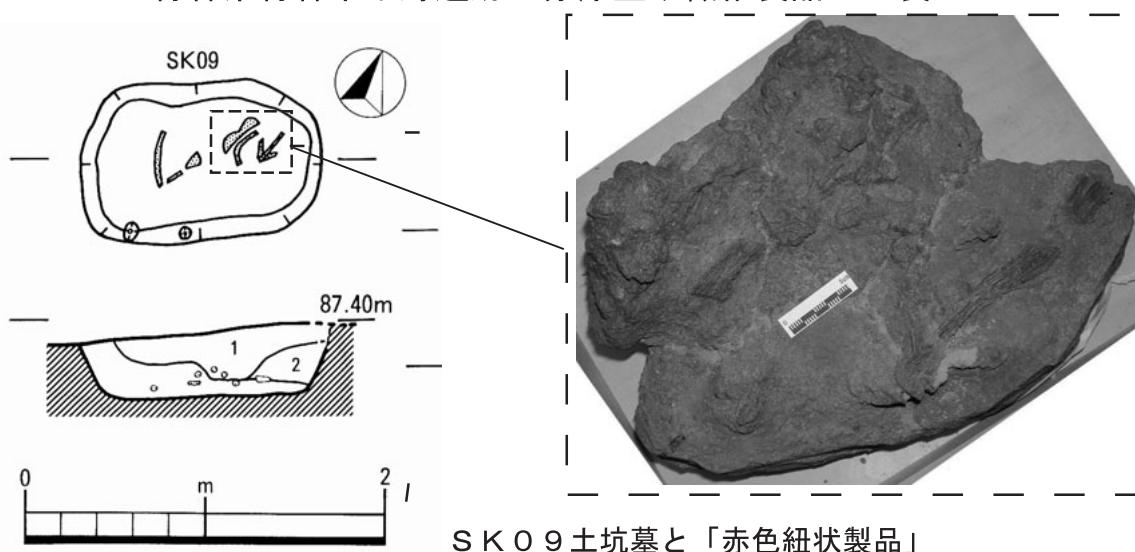
前述の青森県を中心とした晩期の首飾り状纖維製品では、特徴的に石製小玉と併用された例がある。上尾駿（1）遺跡C地区73号土坑墓で出土した「帶状赤色装身具」には緑色凝灰岩製およびヒスイ製の2個ずつの小玉が付けられている。また、青森市平野遺跡でも81号土坑墓出土の「赤色紐状製品」は、緑色凝灰岩製の小玉が組み合わされている。また、朝日山（2）遺跡では、首飾り状の製品が出土したのとは別の土坑墓から石製連珠の首飾りが出土している。これらはいずれも晩期中葉頃の装身具である。石製装身具のうち連珠の首飾りは、北海道内ではカリンバ3遺跡など後期末段階で増加するが、漆塗りの首飾り状の纖維製品もこれにやや遅れて出現し、中葉段階では青森県内を中心にして両者が組み合った装身具として登場するのではないかと考えられる。

青森県六ヶ所村上尾駒（1）遺跡C地区の「帶状赤色装身具」

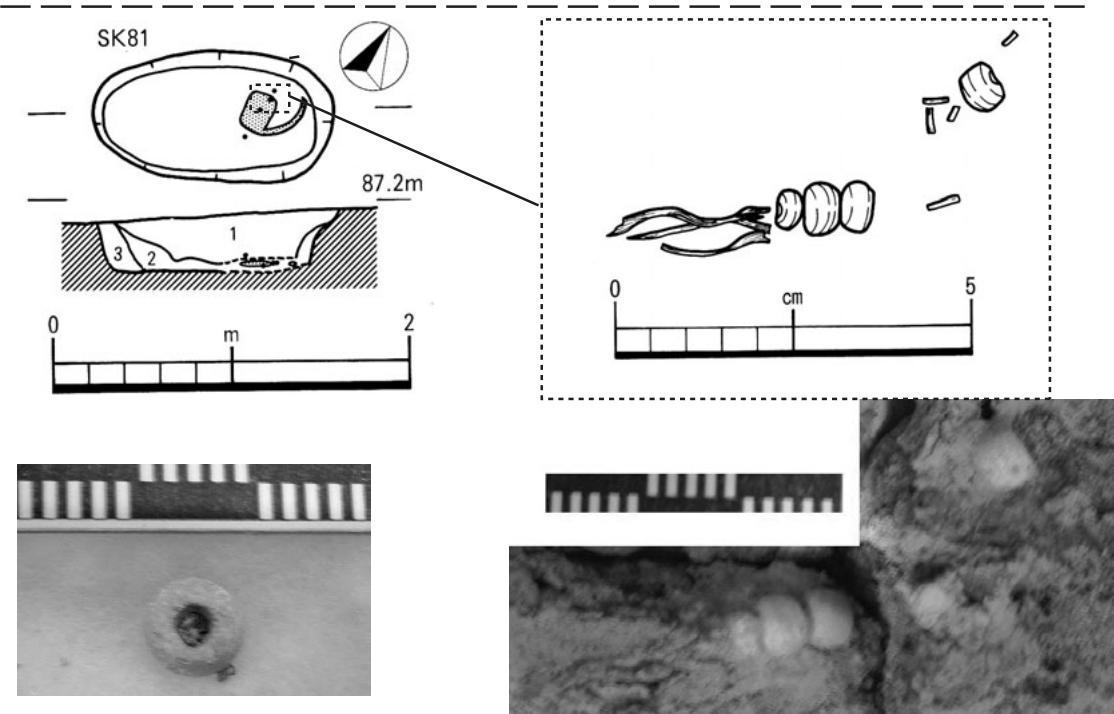


73号土坑墓と「帶状赤色装身具」

青森県青森市平野遺跡の赤漆塗り纖維製品と石製小玉

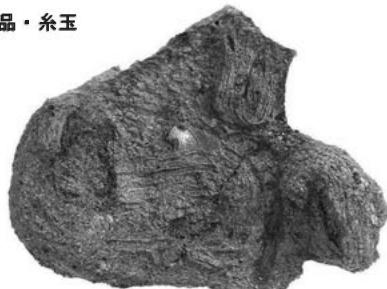


SK09土坑墓と「赤色紐状製品」

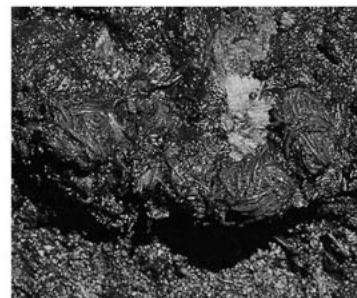


SK81土坑墓と「赤色紐状製品」で繋いだ玉

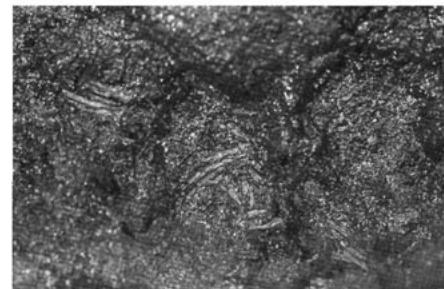
### 各地の漆塗繊維製品・漆糸製品・糸玉



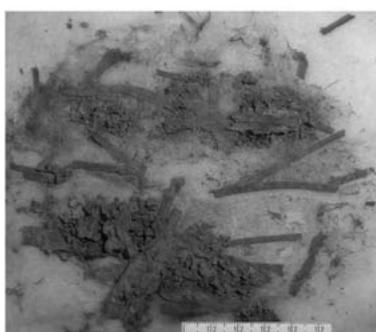
伊茶仁チシネ第1堅穴群遺跡漆塗り繊維製品（報告書より）



忍路遺跡糸玉（報告書より）



安芸遺跡糸玉（報告書より）



土井1号遺跡漆塗繊維製品・腕輪（小林撮影・報告書より）



戸平川遺跡腕輪（報告書より）



小山崎遺跡糸玉とX線写真（報告書より）



分谷地遺跡糸玉と部分拡大（報告書より）



下宅部遺跡朱漆塗り糸玉片（歴博「水辺と森と縄文人」より）



## 縄文時代早期の漆糸製品

阿部 千春（函館市教育委員会）

### はじめに

2001年8月、北海道南茅部町（現函館市）垣ノ島B遺跡の発掘調査において、縄文時代早期所産の土坑墓から赤色の漆様糸（以下「漆糸」）を加工した編布状の副葬品が出土した。現在のところ、早期の漆糸製品は本資料のみであるが、前期前半には新潟県和島村（現長岡市）大武遺跡や北海道標津町伊茶仁チシネ第一堅穴群遺跡などの類例が見られる。また、後期としては富山県小矢部市桜町遺跡や新潟県分谷地A遺跡、福島県三島町荒屋敷遺跡、秋田県北秋田市漆下遺跡、北海道小樽市忍路土場遺跡、晩期には新潟県北蒲原郡加治川村（現新發田市）青田遺跡に見られるなど、漆糸の技法は東日本の縄文時代全般を通じて継承されていたものと思われる。

### 垣ノ島B遺跡の漆糸状製品

垣ノ島B遺跡の漆糸状製品は、縄文時代早期の所産である土坑墓の坑底において、頭部、肩部、腕部、足部にあたる箇所から出土している。漆糸状製品の概要は、幅1.2mmほどの細い紐状素材を芯材にコイル状に巻いた漆糸を加工したものであり、頭部は数本の糸を1組にして髪を束ねるもの、肩部は編布状（約14×12cm）の飾り、腕部は腕輪もしくは袖口の飾りとして使用されていたと考えられる。足部については保存状態が悪く用途は不明である。

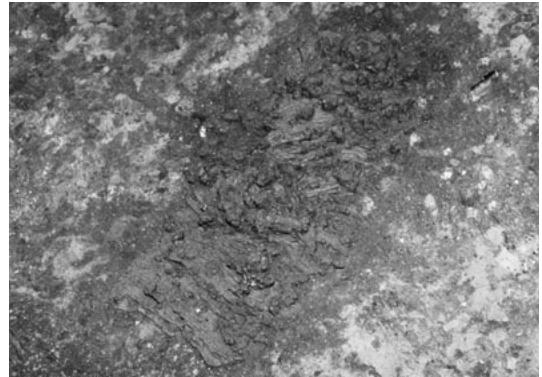
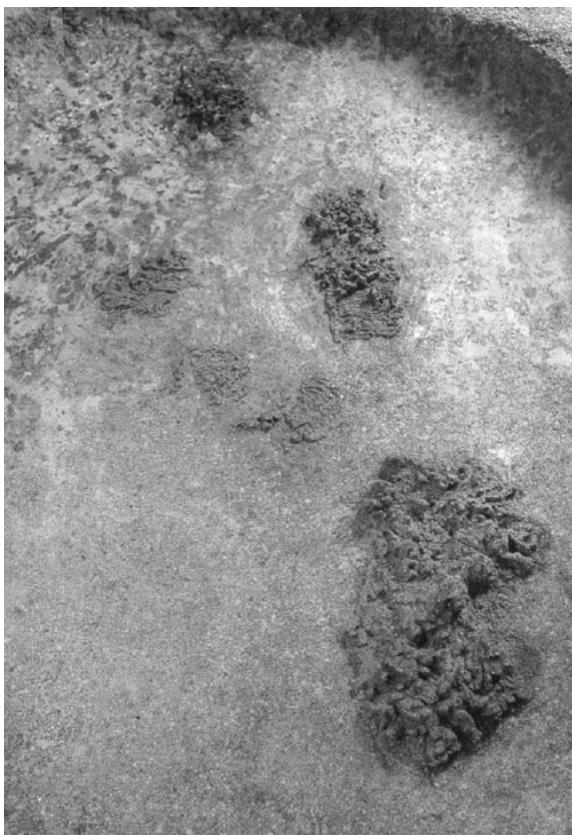
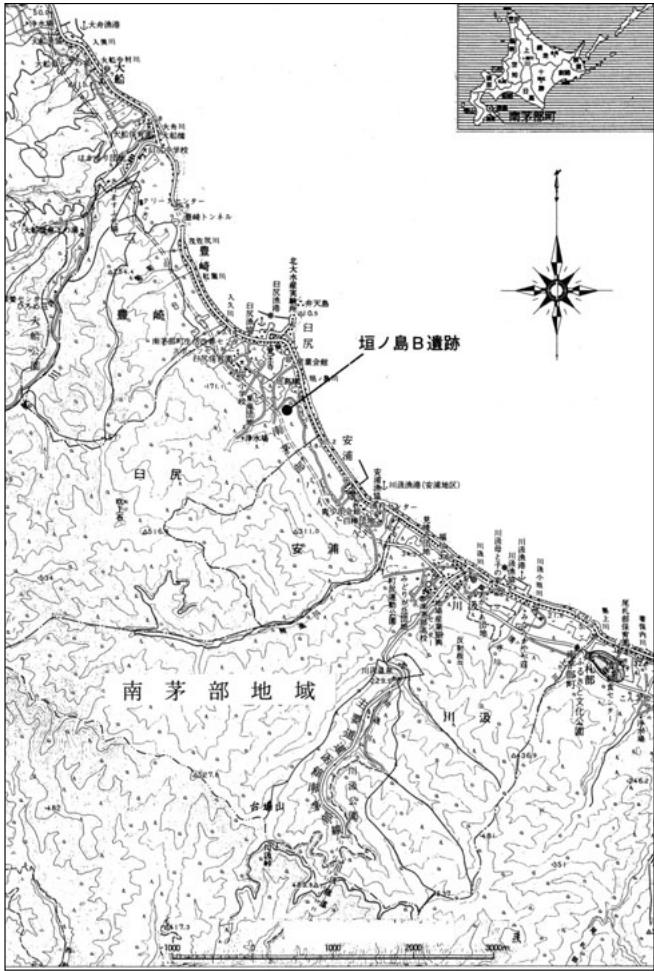
赤色顔料については、国立歴史民俗博物館教授の永嶋正春氏の顕微鏡観察によって、発色の良質なパイプ状ベンガラで、長さが外形の数倍程度という短いものが多いため特徴であることが確認された。また、劣化が著しい中にも、漆膜状を呈する部分も多く認められることから、漆を使用した蓋然性が高いとした。また、放射性炭素（AMS）による年代測定を行った結果、漆糸状製品がつくられた年代は暦年代補正で約7,000B.Cと測定された。

本漆糸状製品については、保存処理後に「発見された日本列島2001」に出展し、その後は整理作業を行っていた調査事務所で保管していたが、2002年12月、事務所の火災により焼損したため、奈良文化財研究所、北海道教育委員会（北海道埋蔵文化財センター）、旧南茅部町の3者による共同研究において、赤外分光分析やX線CR法など多岐にわたる理化学的な分析を行っている。しかし、本資料の解明には多くの課題が残されており、今後も科学的な分析・調査が必要と考えている。

### 漆糸の意義と検討課題

縄文時代における漆糸の使用は、まだ類例が少ないため集成するには至らないが、漆製品としての成立が木胎漆器よりも早く初期の段階から見られることから、日本の漆文化を考えるうえで極めて重要な研究テーマであるといえる。

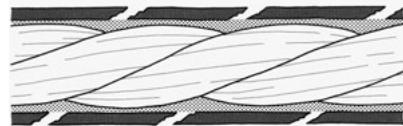
漆糸は木胎漆器や藍胎漆器に比べ、芯材に纖維を使用しているため非常に脆弱であり、低湿地などの好条件が揃わない限り遺っていることは難しい。しかし、垣ノ島B遺跡出土の漆糸製品がある程度完成された形であることから、東日本に広く分布していたことは容易に想像できる。もっと古い段階の漆糸が出土する可能性は十分にあると考えている。また北海道において、早期から晩期まで縄文時代全般を通して続いた漆糸の技法が、次の続縄文時代に継承されないことについては、ヒスイやアスファルトの出土遺跡が激減することと同様に、日本海経由の文化の伝播や交易ルートなどに大きな変化があったことが推測される。



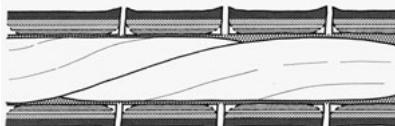
- 左上段：垣ノ島B遺跡位置図
- 右上段：垣ノ島B遺跡遺構配置図
- 右中段：漆糸状製品が出土した土坑墓(P-97)
- 左下段：漆糸状製品の出土状況
- 右下段：編布状の漆糸状製品（左肩）



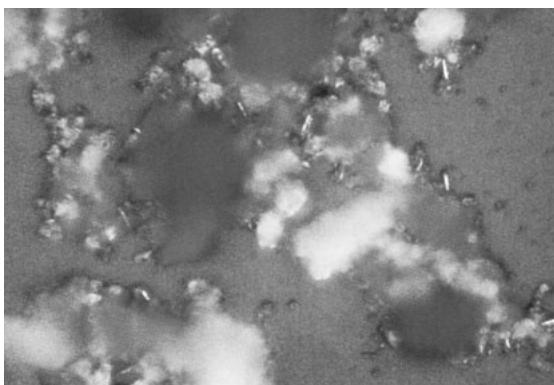
左肩の漆糸（約10倍）



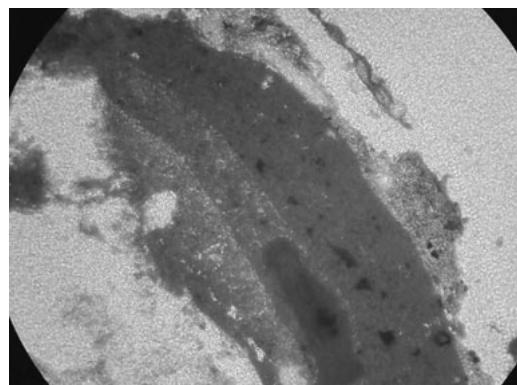
上：縫糸の上に漆塗布  
下：コイル状の漆糸



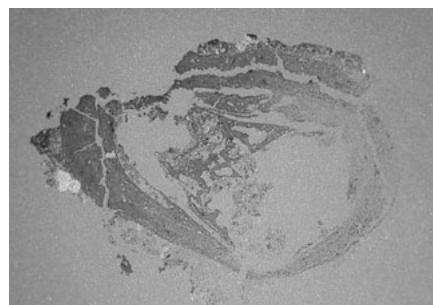
漆糸の構造模式図（北海道埋蔵文化財センター 田口尚氏作成）



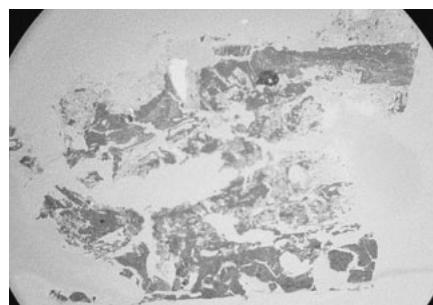
パイプ状ベンガラ（国立歴史民俗博物館 永島正春氏撮影）



塗りの構造



漆糸縦断面（約15倍）



漆糸横断面（約15倍）

\*漆糸の拡大写真は、北海道埋蔵文化財センター 田口尚氏撮影



## 北海道の漆製品

上屋 真一（恵庭市教育委員会）

北海道における縄文時代の漆製品出土遺跡数は50遺跡を超える。時期別には縄文時代早期の函館市垣の島B遺跡から出土した装身具が最も古い。その後、前期に帶・紐状漆製品が道央と道東から出土し、後期中葉になると装身具としての漆塗り櫛が道央部にやや多く出土するようになる。小樽市忍路土場遺跡の低湿地部分から漆塗りの結歯式櫛が出土しているが、それに伴う赤い漆塗りの糸玉、漆液の入った土器などがあることから、北海道における漆製品生産を示すほぼ確実な資料と考えられる。

後期後葉には、恵庭市柏木B遺跡や千歳市キウスなどの周堤墓（環状土籬）から副葬品として漆製品が出土するようになり、漆塗りの弓を副葬するという特徴がみられる。

後期末葉になると、石狩から日高地方を中心に漆製品が多く出土するようになる。道央・道南部から遠く離れる道東の根室市や斜里町に漆塗り櫛の分布があるが、地域的な伝播、流通の問題を含んでいる。この時期には石狩低地帯南部の恵庭市内に存在するカリンバ遺跡、西島松5遺跡、柏木B遺跡第2地点などから漆塗りの装身具が多量出土する。これまでに総計200点以上が見つかっており、なかでも漆塗り櫛は北海道の半数以上を占めている。出土状況は、土坑墓から検出されるものが多く、その場合、遺体に装着した状態の副葬品として出土する傾向がある。出土状態から装身具の使用方法の推定もある程度可能で、内容も明らかになりつつある。

晩期は、櫛、腕輪、藍胎漆器、垂飾などが出土しているが、量的には少なく、後半期には見られなくなる。

ここでカリンバ遺跡の漆製品について少し紹介してみたい。カリンバ遺跡からは後期末の土坑墓が多数調査されているが、そのうち4基が複数の遺体を埋葬した合葬墓で、漆製品の大半はこの4基から検出されたものである。漆製品の総数120点を超える。器種構成は、櫛、髪飾り輪、額飾り輪、耳飾り輪、髪飾り紐（リボン）、胸飾り、腕輪、腰飾り帶などの装身具類である。これに糸魚川・青梅産の翡翠をはじめ、橄欖岩、滑石、琥珀などの石製、土製の玉と勾玉がある。翡翠やサメの歯などは交易で手に入れた可能性の高いものである。単葬墓からは櫛、腕輪、玉類が少量出土するだけで、副葬品の量に明らかな違いがある。単葬墓と合葬墓にみられる副葬品の質・量の違いは、縄文後期における階層社会を考える際の根拠になるものである。

漆製品のうち、腕輪には形態的に多様なものがみられ、環状の輪に付加して、隆起線、膨らみ、突起、ブリッジなどをつけたもの、漆で模様をつけたものがある。胎は、植物質の皮か茎で芯を作り、その上を撚糸や草皮で縦巻きにしたもの、動物の皮を素材にした可能性のあるものなど多様である。これらはカリンバ遺跡タイプの腕輪と呼べそうな特色をもち、色についても赤、朱、赤桃色などの彩色が施されている（図1）。櫛は、腕輪と同じように漆の塗り重ねが認められ、表層に各色の朱塗りが施されている。透かし文様の櫛と透かしのない櫛がほぼ同数みられ、透かし文様のある櫛には5通りの基本的な文様パターンが存在している（図2）。

カリンバ遺跡からは低地面の包含層中に赤い顔料が付着した石皿や、顔料そのものの層が含まれております、漆製品製作の間接的な証拠と考えられる。大量の漆塗り装身具の出土は、縄文時代後期末の装身具生産地と流通の問題を含んでいる。

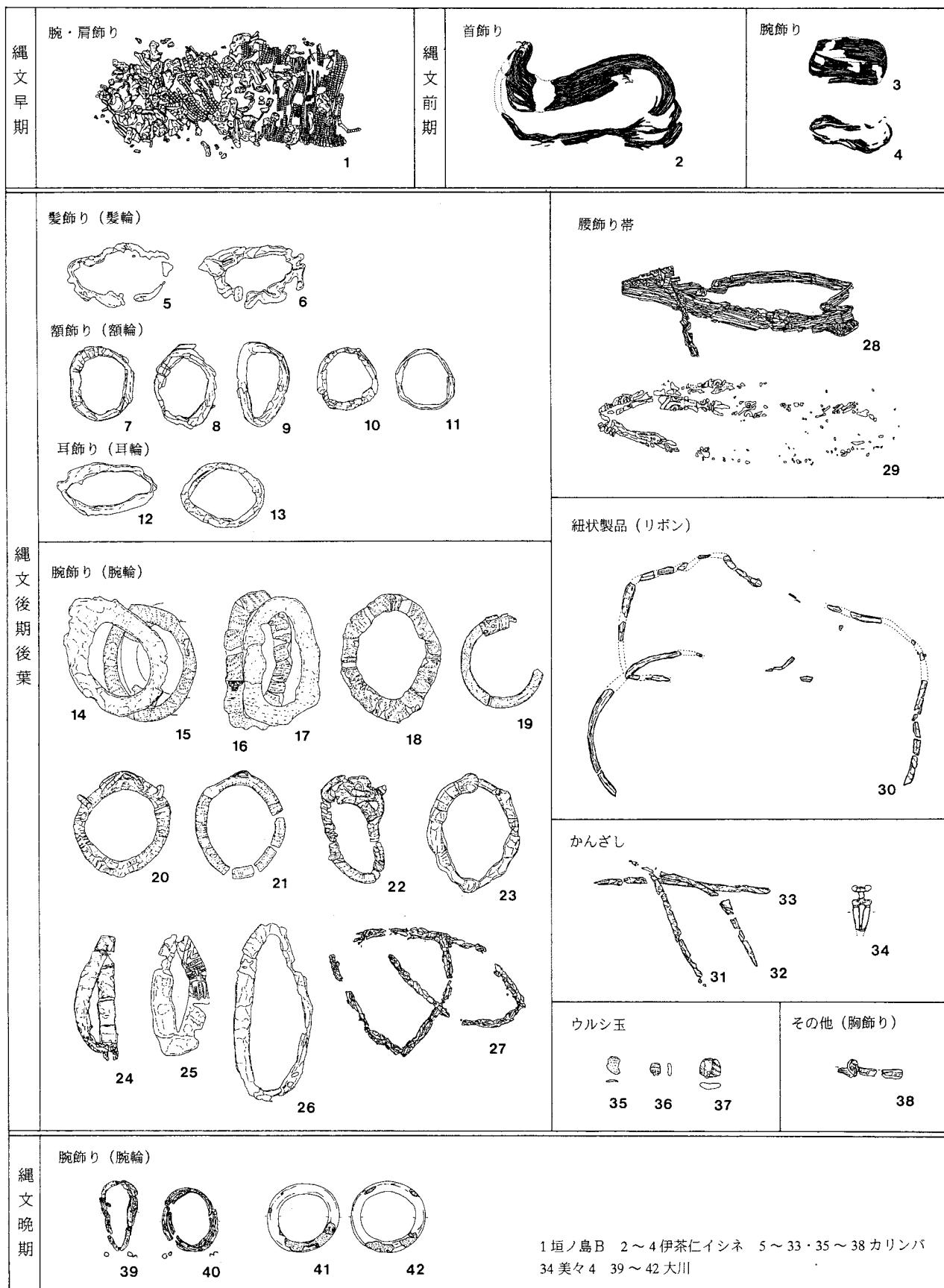


図1 北海道出土のおもな漆塗り装身具（櫛以外）

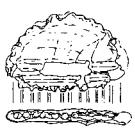
縄文後期中葉	1	2											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
縄文後期後葉	A												B
	1	2	3	4	5			1	2				
	a 14	a 23	a 27	a 31		33		a 34					
	15	24	28					35					
	16	25	29					36					
	17							37					
	18							38					
	19							39					
	20							40					
	b 21	b 26	b 30	b 32				b 41					
縄文晚期	 1 野田生 1 2 ~ 12 忽路土場 13 安芸 14 ~ 19・21 ~ 24・27・28・30・32 ~ 43 カリンバ 20・25 柏木B 26・31 御殿山 29 美々4 44 柏原5 44												

図2 北海道の結歯式漆塗り櫛



## 討論と展望

西野 秀和

(財団法人石川県埋蔵文化財センター)

討論にあたって、司会の湯尻修平氏は縄文時代の様々な装身具の中、北海道・東北地域で濃密に分布する漆製品、北陸から西日本に広がる玦状耳飾の二つに注目し、出土状況と製作技術の系統から交流を考える方向性を示し、討論を進められた。

まずは、漆製品糸玉・櫛の検出状況の確認で、阿部千春氏（北海道）・小林克氏（秋田県）・荒川隆史氏（新潟県）から、土坑墓での副葬品としての出土が多い事と併せて糸玉の製作技術の報告があった。北海道では漆塗装身具は早期から少数例を見るが、後期中葉以降からの石狩低地帯では状況が一変する。髪飾り・腕飾り・櫛等と多様な装身具が異様とも言える多さで出土し、丸玉・小玉からなる連珠も多い。漆塗装身具が多いのは北海道全体に広がるのではなく地域的特徴と捉えられている。漆塗櫛は北海道の広い範囲で見られるが、型式変遷・生産・流通等の究明は今後の課題とされた。北海道で多い透かしのある漆塗櫛と漆塗糸玉は新潟県まで確認されるが、漆塗櫛の一部に北陸西部出土に類した例が見られ、東北と西日本との境界域に位置する地域性が表れていると捉えられる。

次に、玦状耳飾の地域的な在り方についてであるが、北海道、秋田県、新潟県は早・前期に見られ中期初頭では姿を隠してしまう。山本正敏氏（富山県）は、前期前葉と後葉で制作工程に違いがあると指摘される。円盤状に成形したものに大きめの孔を開けた後に切れ目が入る工程であるが、中・後葉では石材が蛇紋岩に変わり、円盤状に整えるのは変わらないが、始めに切れ目を施した後に穿孔する方向に転換しているとされる。また、北アルプス周辺地域に生産遺跡が集まる傾向が知られ、対して消費だけの遺跡もあり、石質鑑定などでものの流れが跡付けられたなら興味深いとされた。西田昌弘氏（石川県）は三引遺跡の玦状耳飾に糸魚川周辺を産出地とする不純石灰岩製の例があり、早い段階での交流があったとされた。木下哲夫氏（福井県）は桑野遺跡の玦状耳飾石材に、茶褐色の滑石系と渡来ともいわれる白色石材との違いに注目している。形態差が時期差を映すともいえるが多様性の表れと解釈され、海を越える交流も視野に入れている。米田克彦氏（島根県）は山陰地域で前期の玦状耳飾は少数であるが、後・晩期の石包丁形が地域的に偏在して出土している事と東日本系遺物の流入は島根県東部までで、西部からは九州との関わりが表れているとされる。九州との交流を示すのは結晶片岩様緑色岩で作られた玉類である。大坪志子氏（熊本県）は九州出土の石製装身具の悉皆的調査から、先の石材が後期後葉に出現する玉類の七割を占めるとされる。原産地は不明であるが、原石採取・供給・製作・分配までの流れが九州在地石材により構築されていたとされる。

湯尻修平氏は装身具の地域性を捉え、各種遺物の形態変遷と製作技術の把握を進める事によって、周辺地域との交流を見ていく方向を示して展望とした。